

日本聖公会 横浜教区

長坂聖マリヤ教会 創立五〇周年記念誌

はなみずき



救主降世 2012 年

目次

巻頭言(司祭 清家智光)	1
長坂聖マリヤ教会創立五〇周年に寄せて(主教 植松誠)	2
人を包み込む教会(主教 三鍋裕)	3
歴代牧師と信徒との座談会	5
一九六二〜一九七六年	
主は恵み深く、その憐れみは永遠(主教 植松從爾)	12
(資料) 長坂聖マリヤ教会についての覚え書き(ポール・ラッシュ)	13
主の平和(植松喜久江)	15
岡谷聖バルナバ教会の事(武藤勝一)	15
箕輪弘道所について(清水純代)	16
長坂での一年間(司祭 八城昂一)	18
建堂五〇周年おめでとうございます(司祭 高良孝太郎)	18
思い出:ポール先生と植松主教と私と(主教 武藤六治)	20
今日も鳴っている、聖なる鐘の音が(司祭 高田眞)	21
『赤れんが』〜中高生修養会のことなど(堀内正基)	23
坂の上の教会を訪れて(佐藤美子)	24
イエス様と出会った!(神林信)	25
共に居てくださる復活の主イエスさまにお祈りしながら(内山明子)	26
ひ孫と一緒に教会に行く日を楽しみに(瀬戸けさ子)	27
イエスさまに出会ってしまった(前島保子)	28
(資料) 勸話「たけふみちゃんの十字架」	29
詩集『いろり火』より(興水江つ)	32
一九七七〜二〇〇四年	
一つの行事の思い(司祭 大澤克次)	34
長坂聖マリヤ教会での思い出(司祭 片山謙)	34
愛餐会について(浅川安子)	35
五〇年の教会生活とハナミズキ(前島毅・保子)	36

マリヤ教会のハナミズキ(植月躋)	37
思い出深い長坂の信徒さん達(司祭 古川潤児)	37
祭壇の花と私(古川敬世)	39
讃美歌を歌う会の思い出(植月美代子)	39
詩集『心の詩』より(神林実)	40

二〇〇五〜二〇二二年

地域に開かれた教会としての長坂聖マリヤ教会(司祭 松村誠)	42
新牧師館及び、会館建築関係(浅川敏)	42
長坂聖マリヤ教会コンサートについて(佐野紀人)	44
バザーについて(浜口真理)	45
教区婦人会の役員当番の思い出(中村登枝子)	46
祈りの教会 ― 長坂聖マリヤ教会の五〇年(有泉均)	47
これからの教会(佐野紀人)	48
教会の音楽の中で育ち、現在の私がある(堀久美子)	48
回想(浅川安子)	49
讃美歌クリスチャン(浅川敏)	49
君江さんと私(神林俊子)	50
再び教会生活に戻ることができて(清水正子)	50
今はただ神様に感謝(佐野恭子)	51
神へと帰る私の道(フィリップ・マカティ)	52
神様に任せます(マカティ菊枝)	53
アッシジのフランチエスコの事(植松昌)	53
罪深き私が神の愛にふれる(森岡一夫)	54
わずか二年間でしたが(執事 友寄景方)	55
土を耕す者として(執事 眞野玄範)	55
(資料) 創立五〇周年記念礼拝説教(主教 植松誠)	56
(資料) 歴代教会委員・統計表・年表	60

巻頭言

司祭 清家 智光

長坂聖マリヤ教会五〇周年の時を迎え、主の御名を賛美し、感謝いたします。

五〇周年の時に何を記念し、お祝いすべきでしょうか。何を省みることが最も大切なことでしょうか。

五〇年といえは人間の人生からみると働き盛りの時期である。私たちは五〇年にふさわしい成長をしてきたでしょうか。

この五〇年誌に先人たちが多くのことを語ってくださっている。その一つ一つの声は強烈な激励と檄を与えるものである。この記念誌で今までの歩みを知り、反省し、成長の糧としていかねばならない。「歴史は繰り返す」という言葉がある。繰り返しながら土台固めをしなければならぬ部分と、決して繰り返してはならない部分がある。

今日まで十三名の聖職が様々な立場で当教会の伝道・牧会に関わって下さった。その間、百十一名の兄弟姉妹が導かれ、洗礼盤のお世話になった。

この記念誌を、次の百年への力強い踏切板に、聖職・信徒が一丸となって福音の種蒔きに専心する実行力の糧にしていかねばならない。

五〇周年を感謝しつつ。



長坂聖マリヤ教会創立五〇周年に寄せて

北海道教区主教 ナタナエル 植松 誠

長坂聖マリヤ教会創立五〇周年、おめでとうございます。

私たち家族が、長坂の教会開始と共に、清里から移ったのは私が小学校五年生のときでした。あれから五〇年、私は今年還暦を迎えました。最近自分が歳をとってきたことをよく実感します。そして、私の人生のいろいろな場面で出会った方々のことを思い出すことがよくあります。中にはあまり意識してなかった人、あまり思い出したくない出会いや関わりなどありますが、今、自分の来し方を振り返りますと、何だかんだと言いなながらも、今の私の存在は、これらの方々との出会いの中で形作られ、少なからぬ影響を受け、祈られてきたその集大成であると感じづく思われます。嬉しかったこと、辛かったこと、悲しかったこと、そして自分の中で消してしまいたい過去のある部分など、それらのどれ一つ、無駄になることなく主は用いてくださり、恵みに変え、今の私にまで導いてくださったことを思い感謝に堪えません。

私にとって、長坂時代は多感な少年時代を過ごしたところです。野瀬秀敏主教様から預けられた他の二人（ある時期は四人）と共に、三、四年間、小神学校のような生活を送りました。朝六時の礼拝は、特に冬の厳寒期にはとても辛いものでした。このような生活の中で、教会や親への反発など、大いに私の心が荒れていた時代もありました。長坂を離れたら、もう教会には行かない…と内心決意していた私が、今、このように聖職として生かされていることの背景には、あの長坂聖マリヤ教会の畳敷きの礼拝堂に座って祈っておられた信徒お一人お一人のお姿、その生き方、その祈りによって、当時意識してなかった信仰の世界が、私の中に植えつけられていたのだと思わざるを得ません。その意味でも、長坂聖マリヤ教会は私の心の大切な出発点なのです。

神様の豊かなお導きと祝福が、長坂聖マリヤ教会の上にありますように。



若き日の遠藤主教と植松誠主教と共に（於 旧会館）

人を包み込む教会

横浜教区主教 ローレンス 三鍋 裕

長坂聖マリヤ教会創立五〇周年に当たり、教区主教としてまた管理牧師として、さらに「長坂の子」の一人としてご挨拶申し上げます。

清里の教会の働き、広がりとして生まれた長坂聖マリヤ教会が認可されたのは一九六二年四月、聖堂聖別が同年六月六日です。植松従爾司祭（老主教様）が初代牧師、信徒の教籍番号一番が地域医療に貢献された喜久江夫人。このお二人から始まって、長坂は「人を包み込む教会」になりました。初期の長坂には色々な人が包み込まれていました。教籍番号三番のご子息にとってはご不満もありだったようですが。

牧師も代わり時代も変わりましたが、長坂の教会には変わらないものがあるように思えるのです。何人もの聖職が、長坂で勤務することを通して育てられました。勤務だけではなく、召命黙想会などの活動でもお世話になることが多くありました。普段は静かな教会に元気な若者が集まるのですから大変だったことでしょう。静かな笑みをたたえながら食事などのお世話をしてくださった信徒の方々に包み込まれて過ごす数日でした。難しい講話よりも静かな笑みと奉仕の姿から、わたしたちの多くは、奉仕とは召命とはと教えられた気がいたします。以前からお庭は広かったですが、決して良い設備であったわけではありません。しかしなぜか、長坂には召命黙想会や青少年活動に相応しい教会としてお世話を掛けてきました。派手なことはありません。ただ忠実に信仰生活に励み、奉仕を喜びとし、人を包み込む姿が何人もの聖職を育て、青年たちを励ましてくれました。多くの仲間にとって忘れられない教会なのです。あの教籍番号三番さんも結局は聖職になられました。

最近はずいぶん長い間教会から離れていた方が、交わりに帰って来られることが少なくありません。他の地域から移り住んで来られる方もおられます。帰ってくる人、訪ねて来る人、誰をも包み込む教会であり続けて欲しいと願っております。新しい五〇年の上に御祝福をお祈り申し上げます。



2012年 東神協働バザーにて（於 山手聖公会）

歴代牧師と信徒との座談会

◆ 出席者： 武藤六治主教（一九七六～一九七七）、高田眞司祭（一九七六～一九八五）、友寄景方執事（二〇〇八～二〇一〇）、眞野玄範執事（二〇一〇～現在）、浅川安子、佐野紀人

◆ 日時：二〇一二年四月二二日、会場：市川聖マリヤ教会 マリヤ館



佐野「本日は、今年創立五〇周年を迎える長坂聖マリヤ教会の五〇年の歴史を振り返り、先生方とお話を致したく思います。今日お集まり頂いた

のは、当教会の初代牧師植松主教共々、姉妹教会である清里聖アンデレ教会とも深いご縁のある武藤六治先生、植松先生の後ご尽力頂いた高田先生、懸案解決にお力を注がれた友寄先生、そして現在ご奉職頂いている眞野先生です。信徒としては、先生方と教会生活をご一緒させて頂いた私、佐野と浅川安子姉です。

先ずは、当教会設立の経緯、その前後の主要な出来事から話を伺い、その時代背景、思いで深い出来事等話を進めてゆき、その後、この地長坂の伝道活動上の核である農村伝道等につき座

談会を進めてゆきたいと思えます。では先ず武藤先生から当教会設立前後のお話を伺いたいと思えます。」

武藤「長坂聖マリヤ教会の歴史を語る時に、清里聖アンデレ教会の五〇年誌、長坂聖マリヤ教会の十五年誌及び、ポール・ラッシュユ伝をお読みになれば、その全貌が判りますが、今日はそれらに書かれていない前史ともいべきお話をしたいと思えます。」

佐野「清里、長坂の教会は隣の長野県の岡谷聖バルナバ教会と深い繋がりがあると聞いています。」

武藤「それは、これら山梨の教会の隣接教会であった岡谷バルナバ教会の働きで、当時の岡谷は製糸業で栄えた街で、長野県のみならず、近隣の県から来られた多くの女工さんたちが、大変厳しい環境で働いておられました。当時、女工哀史で有名な『ああ野麦峠』で書かれている様な女工さんに深い同情を寄せた、カナダ聖公会からのV C スペンサー長老、ホーキンス、フォステル両婦人伝道師といった先生方がおられました。岡谷の教会建築に当たっては、これら女工さん達が、激しい労働の後に来られた時に寛いでお祈りが出来るように、今の清里、長坂と同じ様に聖堂の床を畳にしました。女工さんの中から何人も洗礼を受ける方が出ましたし、その中の何人かは、山梨に戻った後も信仰を続けておられました。」

友寄「私も長坂での奉職中に、長沢でその中のお一人にお会いした事が有ります。」

武藤「その様な訳で、岡谷の教会は、女工さんたちの出身である農村への宣教が必要だと考えるようになりました。その農村伝道の為に祈り、協議した結果が『聖公会勤農奉仕団』です。中部教区もこの計画を支え、協力しましたが、たまたま農村伝道をしようとしていたBSA (The

Brotherhood of St.Andrew' 聖徒アンデレ同胞会) が陰の力となってこれを応援したのです。この奉仕団の活動は、農場経営をし、これを通して農村に奉仕し、福音を伝える事を意図したものです。そして、先ず土地の取得をすべく清里、大泉、笹尾辺りを訪ねまわったのですが、適した土地が見つからず、農場経営による農村伝道は挫折してしまいました。しかしその後、一九三八年にポール先生を中心とするBSAによって清泉寮が建てられました。その後の清里の働きを思う時、BSAが支援したあの『聖公会勤農奉仕団』の働きが、播かれた種になっていたのではないかと神様の不思議なみ業に心打たれるのです。

「上田聖ミカエル教会の事もお話ししなければなりません。野辺山、佐久周辺は中部教区の上田聖ミカエル教会の教会区で、信徒が何人かいましたが、清里の教会ができたときに、この地域の宣教について当時の中部教区の大西主教、上田聖ミカエル教会の水藤司祭、そして南東京教区(現横浜教区)の前川主教、清里聖アンデレ教会の植松司祭の四人が集まって、小諸辺りまでを清里の伝道区とすることになりました。二つの教区、教会と一緒に、協力して宣教に励んで行きましようという力強い協働の宣言でした。一九四八年頃の話です。」

「清里の教会は、当時の宿谷司祭、植松執事のお働きにより、その後順調に発展して行き、北巨摩郡に信徒が増えてゆきました。そんな頃、ポール先生と野瀬主教の間で、この地に七つの教会を建てようとの話が交わされていました。結果として、長坂聖マリヤ教会が唯一実現するのですが…この土地取得の為、キープの興水國雄さん達が大変苦勞なさいましたし、その頃、ポール先生が『スタダ、スタダ』と言っておられたのを今でも良く覚えています。」

高田 「私は長坂で初め執事として勤務していた時に、今でも居られる清水純代さん達のお出でになった箕輪弘道所で色々な活動に携わりましたが、

この弘道所もその教会候補の一つだったのでしょうか。当時この場所は畑の中に有り、土埃が酷く、先ず大掃除から始めなければならなかったのを思い出します」

武藤 「弘道所は、当時キープが農村センターとしての働きを果たす為に、周辺各地に作り、伝道集会、子供会、農業指導、医療講習会等が行われていました。一九五七年の話です。教会とは別の組織ですが、長坂の前史として重要な意味を持つことになった活動であっただけでなく、キープの歴史の中でも有意義な活動であつたと記憶されるべきものと思います。しかしやがてテレビの普及や行政がそれらの活動を行うようになったりして、弘道所の伝道集会に集まる人は少なくなつてゆきました。そんなことでキープの事情なども有り、弘道所の働きは中止され、建物は各地区に委ねられるようになり、弘道所の使命は終わりました。」

「一九六〇年頃になると、清里の教会の信徒数は一四五名ほどになり、その分布も今の高根町、須玉町、長坂町、小淵沢町にまで及んでゆきました。交通機関も整つていなかつた頃の話ですから、植松司祭(当時)のご苦勞は大変だつたと思います。信徒も、主日礼拝を守る為に四時に起きて教会に出かける人、前夜教会に泊まる人、皆さん熱心でした。そんな頃(一九五五年)、原輝泰さん、白倉昇一さん達が中心になって信愛伝道会が生まれたのです。これは、伝道集会、子供会等の働きと共に、各自が置かれている立場で信仰生活を充実させ、思いと言葉と行いによって主を証すると言う事に力点がありました。」

「信愛伝道会がこの様な働きをしている時、一九五七年、最初の弘道所、箕輪弘道所が開所します。翌年初ミサが献げられた日の記録を白倉さんが次のように記しています。『二月二十九日午前九時より弘道所において初めてのミサが献げられましたが、引き続き地区信徒の懇談



ポール・ラッシュ博士が野瀬主教に、完成した長坂聖マリヤ教会の建物と土地の目録を手渡している

会を行い、次のことを決めました。毎月第三週の火曜日午前九時よりミサ、礼拝後勉強・懇談・協議。毎日曜午後七時より晚禱後、伝道集会。』この場で信愛伝道会のメンバーにより、長坂聖マリヤ教会設立に向けて具体的な第一歩が踏み出されました。これは長坂の教会の歴史にとって、極めて大きな意味を持つものでした。教会建設に当たっては、土地取得から建築までの費用の殆どはポール先生を通じて内外の、殊にアメリカの婦人信徒の献金によりますが、たとえ額は小さくても、信愛伝道会の信施を神様は喜んでお受けくださったのです。かくして、清里聖アンデレ教会の信徒殊に、信愛伝道会メンバーの祈りにより、一九六一年に起工式、一九六二年に聖別式が行われ、植松司祭を牧師として、清里の教会から五二名の信徒が移って長坂聖マリヤ教会の歩みが始まりました。『長坂聖マリヤ教会』の名は、野瀬主教さんがお付けになったのだと思います。横浜教区は各県に必ず一つマリヤの名を冠した教会を建てていきますから、それ故でしょう。』

「長坂での教会建築が具体化した頃から、清里聖アンデレ教会の第一主

日の信施が、長坂の教会の建築資金として捧げられ、教会完成後も暫く続けられました。それは、清里が長坂を助けると言ったものではなく、両教会の姉妹関係の現れであり、協働のしるしでした。」

武藤「BSA及びキープ協会の働きについても、お話ししておきたいと思います。聖公会教会とBSAの関係については、BSAの岡谷の勤農奉仕団活動支援や、その後のポール先生を通してのBSAによる聖公会信徒研修、そしてこれがキープ協会設立に繋がった事を憶えたいと思います。そしてこのキープ協会が、長坂聖マリヤ教会設立に当たり、その名義で土地、建物を購入し、これを横浜教区に寄贈したのでした。その時の写真が残ってますね（上掲写真）。」

佐野「では、長坂聖マリヤ教会が出来た頃を振り返って見ましょう」

友寄「私は在任中に、今の中央線が日野春辺りから長坂に向けてスイッチバック方式が取られていたと聞いて、隔世の感を覚えるのです。教会周辺も今とは大分違っていたのでしょうかね」

浅川「当時は、教会は高台にあったため、彼方此方から良く見えて、鐘の音も良く聞こえ、丘の上の教会といった感じでした。」

友寄「当時の長坂は、生糸産業で賑わう新興地域といった趣の町だったようですね、多くの人の住む、教会建築に相応しい場所だったのでしょうか。当時は丘の上にあった教会は、電車からも見えたそうですね。」

浅川「教会の周りには何も無かったし、敷地も今よりずっと広がったので、四方の山々が見え、その教会に坂を登って行くのはとても気持ちのよいものでした。」

高田「長坂の教会の特徴の一つは鐘楼が無かった事で、丘の上に教会があったので、鐘楼は必要なかったのでしょうか。」



八ヶ岳を背景にした創立の頃の聖堂。周りに家はなかった。

佐野 「植松先生や高田先生が雨の日に傘を差して鐘を打っておられた姿がよかったです。鐘は礼拝の呼びかけとしても、とても大事なものですね。」

武藤 「当時は本来の意味とは別に時刻をしらせる大事な役目を負っていました。鐘を聞いてから町民が行動を起こす事も多かったので、定刻に鐘を打ち鳴らす事にある種の緊張を強いられましたものです。又当時は、清里も同様でしたが、水道が無かった為、水はとても貴重なものでした。」

高田 「長坂の教会では、井戸を掘ったのですが、水が出なくて往生しました。勿論下水もありませんでしたから、冬季の下肥処理は、本当に難儀でしたね。又多くの信徒さんが農業に従事しておられたので、農繁期には畑で伝道したり、サイ

ロ作業の手伝いの折にお祈りをしたりする事が多かったと記憶しております。伝道の帰り、明野から見えた山々、東に茅が岳、南に富士、西に甲斐駒そして、北に八ヶ岳と、それは素晴らしい眺めで、この地で伝道活動のできることに、特別の喜びを感じたものです」

「長坂では植松主教さんと武藤主教さんが持っていらしたものである中で育てられた思いがあります。植松主教さんには、武

藤主教さんや長坂の教会に残されたものを通して会っている感じがありました。誰もが目にするような玄関やいろんなところに『交わりの三省』の紙が貼ってありました。「互いに祈りあっていますか。互いに愛しあっていますか。互いに赦しあっていますか」というものです。その時はこんな所に貼ったって…と思ったりもしましたが、後から考えると、生活を単純素朴にとっても大切にされる植松主教さんの霊性の現れだったと思います。

眞野 「高田先生の時代のことになるとと思いますが、信徒総会の資料に信甲教役者会というものが始まったという記録がありますが、どのようなことをされたのでしょうか。」

武藤 「信甲教役者会は、私と高田司祭、岡谷の久保田司祭の三人の集まりで、岡谷と長坂の間の地域に教会がないから、この地域の宣教を考えようという集まりでした。カトリックの司祭を知っていた久保田司祭の紹介で富士見のカトリック教会に行つて、拠点に使う場所を提供してもらおうというところまで話が行ったけれど、さあ何をするか、久保田司祭の転任で計画倒れになったけれども、楽しかったよ。」

高田 「この会は、丁度BSAのVisionのようにお二人の先生が、アイディアを出し合つて、燃えていましたね。当時の武藤司祭さんの言葉で『型にはまらずにやっつけていこうや』という感じでした。」

武藤 「高田先生も燃えておられましたよ。牧会資金制度というものがありませんでしたが、お金がないということで、では週に三日、四日、運転手として働こうとやって、高田司祭は大型の免許をとりました。その間長坂と清里の牧会が私が責任を持つと、そのようにして二人で協働牧会をやろうと。そんな生意気な話をしていたこともありました。岩井主教にちよつと話しましたが、反対はされませんでした。」

佐野「高田先生、トラックの運転手をしたのですか？」

高田「いや、しませんでした。でも巡礼の時にバスを借りて浜松まで運転したりしました。」

武藤「高田先生が転動された後着任された、大澤先生のやられた大斎節中のリトリートも、忘れられない活動でした。『主禱会』と称して、旧会館を木の枝みたいなもので仕切って、三泊四日合宿して行うのですが、大澤先生の奥様のお作りになる一杯の芋粥と二切れの沢庵だけの食事の時間は『靈的読書の時間』と呼ばれ、朗読を聴きながら食べます。座禅の合間には歩行禪がありました。大澤司祭が「経行（きんひん）に入ります」と大声を発すると、聖堂の中を足を踏みならすようにして歩き回るので、日が昇る前に外で歩行禪をすることもありました。他に三原先生、橋本先生もご参加になっていらっしゃいました。」

高田「大澤先生はそのことをあまりお話になりませんが、当時信濃境にカトリックのドミニコ会の押田成人神父しげとという禪に通じた方が高森草庵という庵を結んでおられ、大澤先生はこの方に傾倒していたのです。合宿の最終日のミサを終えると、今度は一転して奥様に豪華なお料理をご馳走になりました。」

浅川、佐野「先生方が、その様な聖職者訓練を行われていた事は、終ぞ知りませんでした。」

浅川「教会内での聖職者訓練と言えば、長坂の教会では沢山の神学生の夏季勤務がありました。あれはどういう経緯で始まったのでしょうか。」

武藤「野瀬主教はご自分が東京聖アンデレの山田助次郎長老に育てられた経験から、最初に清里へ派遣された宿谷先生と植松先生を中学生の時にご自宅に引き取られ、高校まで世話をされました。二人を将来神学生にしたいという意図で手元に置かれたのです。植松主教もまた教会の

主任牧師になられた後、同じような意図で牧師館、ヴェストリーに高校生、神学生を預かることにされたのだと思います。当時は、これ以外にも居候の様な人が、何時も教会で寝泊りしておりました。当時高校生だった植松誠首座主教はこれを不満に思っ、随分植松老主教を困らせたと聞いています。その諍いの度に、老主教が、ただ、『置いてやりたいんだよ』と言われていたのを思い出します。」

眞野「夏季勤務した神学生の他にも、沖繩の高良司祭、北関東の輿石司祭のお二人は高校時代をこの教会で過ごされてますね。」

武藤「輿石司祭は山梨出身の方で、植松老主教の留学中に留守を預かった八城司祭とは、今でもとてもご懇意ですね。八城司祭は、素敵な方で、ダンスもお上手ですから、女性に猛烈な人気がありましたね。」

眞野「最後に当地のような農村でのキリスト教宣教についてお伺いしたいと思います。主に人間関係が希薄で彼方此方から来た人が新たな共同体を必要とする都市部でキリスト教は普及しましたが、開拓で来られた方々、岡谷でキリスト教と出会った元女工さんたち、小海線などの工事のために来て残った朝鮮人の方々を除けば、以前から居られる方々には、どの様にして伝道が行われたのでしょうか。」

武藤「所謂農村伝道ですね。寺、集会、祭り、各種行事を通して強い人間関係を持つ農村部でのキリスト教の布教は難しいと思われがちですが、仏教の停滞もあり、貧しい人、病んでいる人等の救済を通してキリスト教は受け入れられてきたし、身を低くして伝道に勤しめば、道は開けると思います。一八五九年に来日したウイリアムズ主教が、日本の宣教に当たり、農村伝道を強調されたのは、庶民の信仰にならねばならないという事だったと思います。」

佐野「喜久江先生（植松主教夫人、医者）が長坂に居られた時は、あらゆる



甲斐駒ヶ岳を背景にした創立の頃の聖堂

層の方との交わりを持ち、『喜久江信仰』とも言われるような支持を受けておられましたね。喜久江先生が来ると聞くと、地域の人たちがぞろぞろと沢山集まってしまふということがありました。」

武藤 「喜久江先生も、病気を治してやるぞという姿勢ではなかったはずですよ。」

眞野 「高田先生は、在任中の農村伝道のこと、何か思い出はお有りになりますか。」

高田 「確かに信者さんの中には、農業のお仕事をなさっている方は、多くいらつしやられました。信徒訪問をしても、農繁期にはなかなかお会いすることができない。そこで畑に行けばと思ひ行つてみると…「おつ、やつと会えた！」と宝物を見つけたような、うれしかったのを思い出します。畑の畔道等でお話し、最期にいつしよにお祈りの時をもちました。」

した。国の農業政策に振り回され、その最前線の農家は四苦八苦されていると痛感いたしました。陽が出ている間は、天気の良い日は、朝早くからとつぷり暮れるまで、仕事を…という大変さも知らされました。日曜日が晴れたら、礼拝どころじゃない…という生活です。どこかへ旅に行くなどということは、年に一度の農閑期ぐらいの時にしかできないと言う事で、清里と長坂の信徒たちが、一年間この旅のために積み立てをし、何度

かご一緒させて頂きました。行き帰りの電車の中での語り、その訪問先でいろんな人と出会い、お世話になり、おもてなしを受け、それは、それは楽しい旅でした。その出会ったいろいろな人たち、事柄との内に在る、さまざまな神さまの聖さにあずかりながらの素敵な、正に『巡礼の旅』でした。こうした素朴な、ある意味で単純な地域の方との交わりは、都市部のバイブル・クラスの対極に有ると思われ、私の長坂における伝道活動の重要な部分であると同時に、そんな長坂の農村地域で育てられたことを感謝しています。」

友寄 「さきほど、岡谷の製糸工場で働かれた方も、戻ってからは農業をなさっていました。農家に嫁ぎ、農村社会のなかで、つねに教会に通うということは難しいのですが、その方は信仰を失わず、訪問すると、いつも喜んでくださりました。若いころに神様との交わり、教会の生活を深く体験なさった方々は、いつまでも、信心を保つことができるのではないのでしょうか。ただ、悲観的な点をいえば、いつぼうで農村共同体の縛りが強いという点がありますし、葬儀は仏教形式で行わざるをえないということもありました。」

武藤 「長坂聖マリヤ教会の五〇年について色々お話してきましたが、次なる五〇年も、『農村教会』として、そう言うて良いのでしょうか？皆仲良く、素朴に主日礼拝を守つて、聖職者は、信徒消息をきちんと把握しておいて欲しいですね。昔東京教区の牧田主教は、いつも信徒が訪問依頼をする前にお出でになるのを訝つて問い尋ねると『黙想会で神がお示しになる』と言われていたそうです。又教会の歴史的に大事な物、例えば長坂の教会では、ハナミズキ等しつかり守つて欲しいですね。清里でも、ポール先生とか、キープ協会の精神をよく理解すれば、信仰の輪は広がるはずですよ。」

浅川、佐野 「先生方、今日は長時間有意義なお話を有り難う御座いました。」



1962年～1976年

主は恵み深く、その憐れみは永遠

アブラハム 植松 従爾

長坂聖マリヤ教会創立五〇周年を祝し、感謝して主イエス・キリストのみ名を賛美致します。



長坂時代の植松従爾主教（当時 司祭）

(資料) 創立に際しての願い

月報 第二号（一九六二年六月三日）より

・教会委員会からの談話

何から何までまわりの人達の信仰による好意と奉獻によって生まれたこの礼拝堂のなかにあつて…。現地の私達がしなければならぬ一番大切なこと。それは凡てのものにまさって一番尊く価値あるもの、即ち私達自身を神様にささげることにはかならない。

己が身を神の悦びたまふ潔き活ける供物として献げる。
これ靈の祭なり。

(ローマの信徒への手紙第二章一節)

・私の祈りと願い

新しく誕生した長坂の聖マリヤ教会。これこそ、ほんとうに純粋な農村の教会であつてほしい。土にいどみ、汗とほこりにまみれた底から勤労の喜びを知る人たちの集り。数は少ないけれど、初代教会のよくな素朴な気持ちで互に分ちあい助け合つて、この小高い丘の上の教会はあたりを照らす光である様に祈つてやまない。(ヨハンナ輿水江つ)

月報 第四号（一九六二年八月二日）より

・司祭からのお願い

礼拝堂のとびらは、平生しめてありますが鍵がかけてありませんので、ひっぱれば子どもの手でもあきます。ひるでもよるでも真夜中でも、いつでも自由にではいり出来るためです。礼拝堂は「祈りの家」であり、神様との交わりの場所であり、活けるキリストのからだを表現しております。礼拝堂を素通りにしないで、僅かの時間でもなかにはいつておいのりする習慣をつけましょう。…英国教会の底力は、いつも誰かが礼拝堂でお祈りしている、その姿にあるといわれております。祈りのしみこんだ礼拝堂に致しましょう。

(資料) 長坂聖マリヤ教会についての覚え書き

一九六四年六月二五日 ポール・ラッシュ (清里)

長坂聖マリヤ教会は一九六二年六月六日に聖別されました。長坂聖マリヤ教会は、清里聖アンデレ教会の姉妹教会として、北巨摩の西半分における働き、キープの六つの弘道所 (Outreach Village Station) および近くの日野春にある峡北高校 (現 北杜高校) に霊的なサービスを提供するために建てられました。長坂地区に住む清里聖アンデレ教会のおよそ七〇人の信徒とその家族が新しい教会に移りました。

清里聖アンデレ教会でその創立時から働いてきた植松従爾司祭が、教区主教イサク野瀬秀敏師父によってマリヤ教会の牧師として任命されました。

米国聖公会の婦人信徒の多くのグループからの寄付で土地が購入され、聖堂と牧師館が建てられました。聖堂と牧師館は地の利のよい場所に建てられ、村全体を見渡すことができます。さらに、境内地内に、キープ協会の米国後援会の予算六〇〇〇ドルによって学生センターと会館を建設することが計画されています。また、聖堂と牧師館の裏に隣接する六九〇坪の土地を買い足すことを、創立メンバーたちは希望しています。長坂に住宅が建て込んでくる前にこのことが実現するならば、マリヤ教会は日本全体の中で最も戦略的な地所を持つ農村教会となるでしょう。隣接する土地の購入には六〇〇〇ドルかかります。現在、将来教会で働くための訓練を受けることになっている三人の学生が、植松司祭の世話のもと、聖堂の裏側の部屋で生活しています。

一九六四年六月二五日現在、三一人の受聖餐者と二八人の受洗者、計五九人の信徒がいます。一九六二年の創立時の教会員の何人もが、オリソピックの建設工事の仕事のために東京に移住したために失われました。また、一九六三年四月から一九六四年四月まで牧師がサバティカルのために不在でした。それは取るにふさわしく、長く待ち望まれていたもので、彼は米国、カナダ、英国に行き、トロントで全聖公会会議に陪席し、ジェネラル神学校および聖オーガスチン大学で短期の学びをしました。植松司祭の不在の間、甲府教会の副牧師であった八城晃一司祭が家族と共に長坂に移り、牧師館に住みました。植松夫人 (医師) は四人の子どもたちを連れて牧師館を出て千葉県の父の家に移りました。ただし、植松司祭の不在の間、彼女は毎週火曜日六時間かけて清里に通い、聖ルカ農村病院の彼女の患者たちを診ていました。一九六四年のイースター後の日曜日に植松一家がマリヤ教会に戻り、教会は当初の意欲と活動を新たにしたところです。今年はいくつの働きがなされるでしょう。

昨年度の障害にもかかわらず、マリヤ教会は現在毎月七〇〇〇円を教区会計に、一五〇〇〇円を教区基金に、そして聖職者年金に毎月四〇〇〇円を送っています。教区は牧師給与の一八〇〇〇円を払っています。さらに、聖マリヤ教会の教会委員会は教会運営維持費をすべて自ら賄っており、一九六四年五月以来、相模原での宣教のために毎月支援金を送っています。秋には月約献金が毎月一二〇〇〇円に達するか、それを超える見込みです。教会員は主に農民であり、彼らからの献金は収穫を待たなければなりません。長坂では、七月に小麦の収穫があり、一〇月下旬に高地でできる米の収穫があります。

植松司祭は、できたばかりの農村教会の開拓の働に加え、キープの六つの弘道所の霊的監督の仕事を担っています。長沢（ホワイトフィッシュベイ・クライストチャーチ）、箕輪（西ミシガン・ハウス）、泉（コロンバス・ミラー・ベイカー・ハウス）、西井出（ジョージ・ワシントン・ハウス）、北の割（聖パウロ・ミルウォーキー・ハウス）、蔵原（ジョン・C・H・リー記念ハウス）。また、日曜学校の指導をしたり、教会に居住する三人の高校生を訓練して将来神学教育を受ける準備を助けている他、村人たちと数々の集まりを持っています。水曜日と祝日には朝六時に聖餐式を行い、毎朝夕の祈りを献げています。日曜日には、朝六時に聖餐式を、九時半に早禱を、一〇時から聖餐式と説教を行っています。

一九六四年の教会委員は、白倉昇一氏（農民）、早川登氏（教員）、金原万吉氏（韓国人、廃品回収業）、飯島禹賢氏（農民）、白倉和子氏（農家主婦）です。白倉昇一氏は横浜教区の代議員です。

マリヤ教会の裏側の仮の学生寮の部屋には、牧師の世話のもと、高良孝太郎（峡北高校一年生）、興石あきら（長坂中学校一年生）、植松誠（長坂中学校一年生）が住んでいます。一九六四年九月には、一九三〇年代に聖アンデレ同胞会の立ち上げを助けてくれた聖アンデレ教会の辻司祭の孫であるただおが長坂中学校の生徒となる予定です。

サバティカルから戻ってきてから、ミネアポリスのチャールズ・E・レイ婦人からの一〇〇〇ドルの寄付によって、植松司祭は小さな日本製のマツダの車キャロルを購入しました。この贈り物は、半径二五マイル（約四〇km）四方の村々を廻らなければならない植松司祭の足を大いに早めてくれることでしょう。

（資料）「キープ、二つめの教会をたてる」

ジャパン・タイムズ記事抄訳（一九六二年六月四日）

水曜日十時に、キープ協会は、日本聖公会横浜教区の野瀬主教の司式により、ふたつめとなる教会の聖堂聖別式を行う。

「民衆から民衆への」戦後協力として国際的に知られるようになった高地教育センターの「集いの場（Meeting House）」である清里聖アンデレ教会が一九四八年に建てられて十四年目となる。キープ協会の設立者であるポール・ラッシュ博士は、「集いの場」、「町の集会所（Town Meeting）」、そして、自助の取り組みを教えるための教育農場を建てた。ニューイングランドの初期の入植地の日本版を設計図として描いたのである。十四年前の誕生以来、プロジェクトの全段階は「着物」を着せられ、日本化された。教師、牧師、医師、看護師、農場の指導者、村で働くソーシャルワーカーを、有能な若い日本人から選んだのである。

長坂聖マリヤ教会の聖堂は、米国の教会女性からの贈り物で、清里聖アンデレ教会に似た建物となる。牧師館も完成しており、植松従爾司祭とその家族が入居した。聖餐式の祭服ひとそるいがオハイオ州トレドのヒュー・ラフリン夫妻（Mr. & Mrs. Hugh C. Laughlin）から寄贈された。特注の鉄製の十字架と燭台、その他のオルターの用具はデトロイト（聖ヨハネ教会）のジョンソン司祭（Rev. Dr. C. Johnson）からの寄贈で、サギノー・スタジオで制作されたものである。満州での従軍から帰ってきて一九四八年から清里聖アンデレ教会での開拓的働きをした植松従爾司祭が新しい教会の牧師となる。彼の育てた最初の聖職候補生である武藤六治師が三月に司祭按手を受け、清里聖アンデレ教会の後継牧師となった。

主の平和

ジョイ 植松 喜久江

今から五〇年前、四人の子（めぐみ、誠、のぞみ、功）が、夫々小学校六、五、三、一年生になろうとしていた一九六二年三月に、私共一家は清里聖アンデレ教会から長坂聖マリヤ教会の牧師館に移るようになりました。

今にして思えば、その一ヶ月前に、同じ長坂町の前島毅、保子夫妻に赤ちゃん（武文ちゃん）が与えられていたのでした。

その後約十年を経た頃の教会へはSS（日曜学校）に集まってくる小・中学生が増え、その中にはお友達と連れ立って、あの坂を上ってくる武文君の姿も有りました。

大体その時代には、日本のどの教会へも自然に子供たちが集まってきたようです。

SSの礼拝は、先ず「式文」での祈りで始まりその後、小さな美しいカードが配られ、そこに記された聖句（みことば）についてお話を聴き、「次の日曜日まで今日のみことばを暗誦してきましようね」と約束。どの子も覚えてきませんが、いつも真つ先に手を挙げて、嬉しそうに大きな声で誦えてくれる少年が、武文君でした。

付記、『たけふみちゃんの十字架』故細貝岩夫司祭発刊の小冊子を長坂聖マリヤ教会の礼拝に出席される兄弟姉妹と全てのお方に読んで頂きたいと願います

短い聖句では、「神は愛なり」、長い聖句では、「神は渇いた心を潤し、飢えた魂を良いもので満たされる」等々。今八八歳の私にも、その頃SSの子達に与えられたみことばは、そのまま新たな喜びと、平安を呼び覚ましてくれます。主のみことばは、主イエス様そのもの、「主の慈しみは絶えることなく、変わる

ことなく」いつも共に在って、真実!!。正に「アーメン」そのものです。

さて、その当時SSの先生になって下さったのは、数名の受洗した若い高校生達でした。聖堂でのSS礼拝が終わると、次は分級、各々部屋に散ります。よく晴れた日には、幼いクラスは、外へ出て遊びたいだけ遊び、「これで分級はおしまい」とされた先生もあつたようです。恵まれた広い花木境内で、キャツ、キャツと笑い跳ね回る子等の未だ耳に残る思いが致します。

一九七六年（即ち、創立十五周年を迎えようとしていた前の年）私共は、突然中部教区へのお召しを受け、大好きな長坂の地をあとにしました。

さあ、次の半世紀、創立一〇〇周年を祝い、感謝するその日まで、十字架と復活の主に栄光が満ち溢れますように。

二〇二二年二月三日記す

岡谷聖バルナバ教会の事

ヨハネ 武藤 勝一（清里聖アンデレ教会）

この度、私の属する清里聖アンデレ教会の姉妹教会にあたる長坂聖マリヤ教会の創立五〇周年に当たり、私の信仰歴を顧みると、どうしても岡谷聖バルナバ教会に触れない訳にはいきません。

生まれ住んだ諏訪の地を離れ、戦前一九四三年に召集に応じるまで、私は鉄道省職員として一九三二年に開通した小淵沢―清里間の小海線、清里駅で勤務しておりました。

当時はこの区間を C 56 蒸気機関車が走っており、その清里駅に月に一度、カトリックの神父さまがらの紳士とラフな着流し風の紳士が降り立ち、連れ立って何処かへ行かれておりました。後で判ったことで、お一人は上田聖ミカエル教会水藤司祭、もうお一人は岡谷聖バルナバ教会の竹淵司祭で、当時清里におられた植松司祭の待つ「伝道委員会」に出席される為、清里に來られたのでした。後に、清里聖アンデレ教会の初代教会委員になられた中島さんや、海老名さんといった信徒達と、皆様熱心に宣教活動に勤しんでおられた様です。

私はと言えば、一九四五年に復員した後、仕事の非番、公休時に、当時の宿谷司祭の教会問答等のお話を聞く機会を通し、一九四八年六月十三日、創立直後の清里聖アンデレ教会で前川主教により堅信を受けることが出来ました。当時は B S A 会員の若い信徒たちが土曜の夜毎に集まり、各地の青年団を訪問しては「一人が一人を導く」をモットーに、熱心に伝道活動をしていたのを懐かしく思い出します。未だ長坂聖マリヤ教会の出来る前の話です。で、当時の県下三教会の夏の青年キャンプは、教区の垣根を越えて、清里聖アンデレ教会、甲府聖オーガスチン教会そして、岡谷聖バルナバ教会で行われておりました。

その後私の二人の弟達も岡谷聖バルナバ教会で洗礼を受け、そんな関係も有り、同教会の竹淵司祭にはお宅へお邪魔し、当時珍しかった外国の菓子等ご馳走になったものでした。竹淵司祭には清里駅員の縮小に伴い、駒ヶ根に転勤を余儀無くされた私の親しい同僚を、遙か岡谷より暖かくお励まし頂いた事もあり、特別なご縁を感じます。

その岡谷は当時生糸製糸業全盛の時代で、山梨県からも多数の若い女工さん達が岡谷の工場で働いておられました。彼女らの週末の楽しみは、午前中岡谷聖バルナバ教会で礼拝に出席し、午後は映画鑑賞であったようです。その女工さん達が北巨摩に戻られた後、彼らを探し出して教会に呼び戻す事を

我々伝道委員会で話し合ったものです。その中の方が長坂聖マリヤ教会で信仰生活を続けておられた事に、私はこの二つの教会に特別のご縁を感じます。

そのような訳で、創立五〇周年を迎えた長坂聖マリヤ教会を思う時、清里聖アンデレ教会での私の若き日の信仰生活との関わりで、岡谷聖バルナバ教会は、分ち難く結びついているのです。

当時「絹都」と呼ばれていた岡谷の教会を先年、B S A 清里支部の教会巡りで訪問する機会が有り、当時の製繭祭の賑わい、竹淵司祭のお人柄等、若き日の思い出が走馬灯のように胸に去来しました。何時の日か今一度岡谷を訪れ、当時の感慨に浸りつつ、日々の信仰生活の縁としたいものです。

箕輪弘道所について

モニカ 清水 純代



箕輪弘道所は新町集落の下の方にあり、国道一四一号線沿いになりました。現在、町の福祉センターのある辺りです。当時は町営住宅もあり、その住宅に住んで居られた柴山さんが弘道所の管理をされて居りました。当時は、私も高根の青年団や4Hクラブに属して居り、生活改善や生活の向上を目指して青年学級等で仲間と共に学びあい、青年集会には清泉寮や弘道所をお借りして使わせていただきました。

さて、弘道所の記憶は定かではございませんが、昭和三十五年の日記を手がかりにメモしてみました。

三月八日 清里農村センターより伝道集会の公告が入りました。三月十日午後七時三十分より箕輪弘道所に於いて伝道集会があることを知り、私も友達を誘って行くと、おばさん達が大量来て居りました。清里の教会より植松先生はじめ、信者の方が証しをされ、信仰についてのお話を聞きました。

五月八日 植松先生、武藤先生、柴山先生来られ、十字架の奥義についてお話を聞きました。

九月七日 夜八時より伝道集会 武藤先生が来られ、お話を聞きました。

十月五日 伝道集会。植松先生、柴山先生、輿水先生来られ、田丸さん、板本さん、私で、ヨハネ伝「わたしはぶどうの木、あなたたちはその枝である」について聞きました。

十月三十日 清里農村センターより手紙。家の経営状態、教養文化経済のこ
と等調査。

十一月二日 伝道集会。武藤先生、柴山先生、新町よりおばさん達大量来
れる。

十二月七日 伝道集会。植松先生来られ、クリスマスのころを中心にお話を
聞きました。

以上、日記より私と弘道所とのかかわりでした。

その後の事はわかりません。私も三月には長坂に嫁いで参り、何年か後に再び長坂聖マリヤ教会にて植松先生にお会い出来、ご指導いただく中で洗礼を受けることが出来感謝でした。

長坂聖マリヤ教会の上に、これからも豊かなお恵みがありますようにお祈り致します。

(資料) 信愛伝道会について

月報アンゼラス第七号(一九六二年一月四日)より

このたび、美しい中型の旧新約聖書一〇冊が礼拝堂の備品としてそなえられました。…このたびの聖書(十冊で一万円)は信愛伝道会の基金によるものですが、去る六月六日の聖別式以来、礼拝堂備品としての祈禱書、聖歌集それに今回の聖書を加えて、信愛伝道会より約三万円の寄贈があったわけですが、この基金の由来を考えてみますと、五、六年、或はもつとずっと以前に、北割に地区信徒が集って懇談したとき、農村信徒の伝道団体として「信愛伝道会」が生れ、その後、箕輪弘道所では毎月定期的にミサが執行されるようになった時、将来の聖堂建築に備えて、ミサの献金を貯金したのが信愛伝道会基金のはじまりでした。清里の母教会もともに協力してくださり、毎月第二主日の信施献金をこれに加えて下さる様になり、そのおかげで今日、長坂の教会に一揃えの礼拝用書がととのった事はほんとうにありがたい事です。長坂教会の発足と共に「信愛伝道会」の名前はなくなりましたが、その実体は私達の精一杯のそなえものとして聖壇の上にささげられ私達がいつも神様の御言葉に耳を傾け(聖書を読むこと)、その生命によって養われているときに(聖餐に陪ること)、その素晴らしい日々の生活の中に、ますます豊かに実を結んでゆくものであります。

長坂での一年間

司祭 ジャスティン 八城 昂一

私の甲府から長坂教会への出張期間は、昭和三十八年三月より植松ファミリーの米国留学の一年間。スカイツリーならぬ東京タワー完成、所得倍増などと掛け声宜しく、世は高度成長への道を歩みだしていた時代。とは言え、首都圏ならぬ八ヶ岳山麓はまだ貧しく、礼拝に自動車で来られる信徒は、一人か、二人。(二人は、津金からパブリカで来られる早川さん)他は、徒歩か回数のないバスによる。毎主日礼拝出席者は、十人前後。礼拝後は、牧師館で野菜など持ち寄り愛餐会、広くない板の間でゲームをしたりして、少人数の寂しさどころか、賑やかで、温かく、互いに去り難い時間を過ごしたものです。

箕輪、北割、西井出、長坂各弘道所の月一回の伝道集会も、私にとつては地元の人々との出会い、『奇蹟つて本当にあるの?』等と、率直素朴な質問に對するやり取りを通し、大いに勉強させられました。特に女性の多い西井出では、フォークダンス等取り入れ、私自身集会を楽しませて頂いた。



弘道所回りの当初は、清里の職員の方が自動車で送迎してくださり、お陰で不案内だった道路状態をつかむ事が出来、感激でした。そして更に感謝した事は、初めてのバイク、それに運転免許を授かった事。そして訪問など行動範囲が、自由にグリーンと広がった事、嬉しかったですね。山麓のドライブを楽しませて頂き乍ら(一寸不謹慎?)何時も厳しい教会会計に神経を使っておられる白倉さんはじめ、金原さん、早川さん、飯島さんと言っ

た委員の方々への直接連絡、打ち合わせなどが出来、又何かと心配しておられる清里の母教会、武藤司祭さんとも随意コンタクトが出来、気持ちの上でもホット解放された感じでした。五十年前の長坂で今も想起されるいくつかの事。

○早朝、所用のため訪れた信徒宅で、父親を中心に朝の祈りを唱え合う家族の声、遮らない様に玄関先で祈り待つひと時。

○たまたまの主日、バス会社のストで、二〜三里の道を歩いて礼拝に出席の姉妹の明るい表情。

○ベストリー傍らの聖鐘台。毎朝夕の礼拝前、ラジオの時報に合わせて鳴らす鐘の音。南アルプスの山容と共に、今も耳底に残っています。

五十周年を迎える長坂聖マリア教会の上に又、聖職、殊に管理される三鍋主教、囑託の清家司祭、常駐勤務される眞野執事、そして信徒ご一同の上にご祝福が豊かに有りますように。

建堂五〇周年おめでとうございます

司祭 ペテロ 高良 孝太郎 (沖縄教区)

私は長坂聖マリア教会で峡北高校生(現北杜高校)の三年間を過しました。建堂間もない時期だったと記憶しています。当時、牧師をされておられた植松從爾司祭(現退職主教)とご家族のもとでお世話になっていました。高校生の私と二人の中学生(男子、内一人は誠主教)が聖堂の祭壇裏側の廊下にそれぞれが木製ベッドを置き、共同生活をしていました。会館は翌年に建設されたと記憶しています。毎朝夕六時の礼拝、聖堂内床の拭き掃除が朝食前の日課。私は最初の頃は熱心でしたが次第に礼拝も怠けるようになり、植松

司祭と奥さんには大変なご心痛をおかけし、反省してもしきれません。そのことについて、誠主教（現北海道教区主教）は私の司祭按手式の説教で「植松家の奇跡だ！」と言及していました。

そもそも私と長坂聖マリヤ教会とのかかわりの源は、沖縄県の北部に位置する私が生れた小さな島に伝道に來られた野瀬秀敏主教との出会いからです。その後数年して小学校の卒業式間近のとき、父親に連れられて私は野瀬主教のもとに來て中学三年間を過し、高校への進学の際に野瀬主教は現役を退かれるというところで、愛弟子の植松從爾司祭に私を託したのです。（編注：伊是名村は、戦後、教会の誘致を村議会で決議し、その教会への赴任を志願したのが東京の聖アンデレ教会にいた野瀬主教（当時、司祭）だった。健康状態のため離島したが、その代わりに島の青年を呼び寄せて育てることにし、池原貞雄司祭、高良孝太郎司祭をはじめ、幾人もの沖縄の青年を世話された。）

聖マリヤ教会での思い出は、今でも鮮明に残っているのは八ヶ岳をはじめ、秩父の山々、甲府盆地とその向こうに富士山。さらに反転すると南アルプスの山々、駒ヶ岳、仙丈ヶ岳などが目前に迫ってくる絶好の景色。長坂を離れた後、あちこちで山梨（無）県なのに三六〇度の展望は、山、山、また山ばかりと自慢したものです。あの雄大な景色と長坂の街並みが一望できる絶好の位置にある教会だと。春、夏、秋は広々とした畳の会衆席は最高でした。

が、冬の厳寒時には、常夏の地で生れた私には涙が出るほどの試練でした。ベッドが置いてある場所は外とは壁で遮られてはいますが、火の気が全くなく、隙間風が絶え間なく吹き込み、外気温度と同じ状況、身の毛も凍る場所で寝起きをしていました。朝六時前にポケットサイズのトランジスタラジオを耳に当て時報と同時に礼拝開始の鐘を鳴らしていました。夏は暑く、冬は立ったまま凍ってしまうのではないかと恐怖さえ感じながら暗い中で鉄の鐘の取っ手を素手で掴んで左右に振り鳴らしていました。鉄の取っ手のあまりの冷たさに目から涙を出しながら鐘を鳴らしていたのですが、三二回まで

の数を時々一つ少なかったり多かったり、その度に近所の方に「今日は一つ足りなかった、多かった」と指摘されたこともありましたが、それでも信徒の方々とアラジン・ストーブ（円筒の灯油ストーブ）を囲みながら礼拝を献げたことが、今も楽しい思い出の中心です。

当時の学校では農繁期に一週間程度の休みがあり、信徒の方々の手伝いをしたこともありましたが、稲刈りや田植え、芋ほりの後の畦道や草むらで、皆でいただく食事が生れ故郷での思い出と重なってよみがえります。また、教会敷地内に白樺の木を植えたり、花畑を造ったりとけっこう楽しい思い出もあります。

一つひとつのすべての思い出を書き記すことはできませんが、私にとって長坂聖マリヤ教会で過した三年間が人生の後半に向けての舵取りとなったような気がします。長い間教会を離れていたとき、長坂での教会生活がよみがえり、聖職への道に軌道修正されたのです。当時の信徒の方々との楽しい交流、会館での卓球大会。礼拝後に皆で食べた喜久江先生が作ったシーフードカレーの味は忘れられません。食べ盛りで、おかわりしなかったのにお鍋の残りを見て遠慮したことなど。楽しかったこと、辛かったことも、特に寒さで手がひび割れし、血を流しながら学校に通っていたのも今では思い出の一つです。私にとって、その一つひとつの思い出が今の教会での奉仕の原動力となっている気がします。一つひとつの思い出は、神さまが私に具体的にかかわってくれていた一つひとつだったので。私にとって長坂聖マリヤ教会で過した三年間は聖職の道への誘いの時期だったので。寄り道はあったのですが、結局は神さまによって元の道に戻されたのです。今では私の第二の故郷と位置づけられる、感謝の源泉の地です。

建堂五〇年を迎えた長坂聖マリヤ教会がキリストの体としますます成長し、地域宣教の最先端として歩まれますよう祈っています。

皆さまの上に神さまの祝福が豊かにありますように。アーメン

思い出…ポール先生と植松主教と私と

主教 バルナバ 武藤 六治

愛する長坂聖マリヤ教会が設立五十周年を迎える、感慨一入です。半世紀に亘る聖主の測り知ることのできない大きなお恵みを想い、共々に感謝と賛美を捧げましょう。そして又、新たな半世紀の歩みの上に聖主の豊かなお導きがありますよう熱心にお祈りいたしましょう。

長坂聖マリヤ教会に纏わる思い出は私の中に数限りなくありますが、その中で植松従爾主教（当時司祭）が中部教区の主教に選ばれた時のことがいつでも懐かしい感動を伴ってくつきりと甦ってくるのです。

一九七六（昭和五十一）年九月十五日、この日中部教区の主教選挙のための教区会が行なわれました。朝の礼拝の中でこの教区会を覚えて祈り「どなたが選ばれるだろう」と思いながら日を過ごしました。夕方、岡谷聖バルナバ教会の久保田司祭から電話がありました。（岡谷聖バルナバ教会は中部教区ですが清里・長坂の隣接教会として深い交わりの中にありました。「植松司祭が選ばれましたよ」、久保田司祭の弾む声が聞こえて来ました。「ああそうですか」、何故か私は驚くというよりは、来るべきものが来たという落ち着いた気持ちでそう答えました。この日植松司祭は横浜出張で留守、夜行列車で翌朝長坂に帰ることになっていました。（あの頃は清里・長坂の両司祭はどちらかが出張その他で教会を空ける時は、必ず連絡し合うことになっていました。「明日の朝、植松司祭が帰られてから長坂に行こう」と考えていたその夜、浜松の宿谷司祭（植松主教の大親友）から電話がありました。この時の宿谷司祭の言ったことをそのまま再録するところとなります。『おい、植松が中部の主教に選ばれたこと知ってるな。今長坂に電話したがあいついねーんだよ。あした電話するが、あしたの朝長坂に行つて必ず受けると俺が言っていたと伝えろ、いいな。中部ますますよくなるぞ。』

翌朝長坂の教会に行きました。勝手知った牧師館に入って行きますと、中部教区の使者として上田の水藤司祭と岡谷の久保田司祭が来ていました。びっくりして出ようとしたら植松司祭が「いいからはいりなさい」とにこにこ…二人の司祭も笑顔。昨日教区会後に長坂に来て近くの旅館に泊まったとのことでした。「お受けするという方向でご返事した」と植松司祭。宿谷司祭からの伝言は不要でした。しばらくして二人の司祭はお帰りになりました。いつもは行けば長居をする私でしたが、この日は直ぐに「では帰ります、ポール先生に伝えたいですから」と言つて外に出ました。車にエンジンをかけて発とうとしましたら植松司祭が「待つて、私も行くから」と追いかけて来て同乗されました。

キープのポール先生の家に着きますと、ポール先生は寝巻き姿で寝室のベッドの脇に座つておられました。あの頃のポール先生は体調があまり芳しくなく寝室での時間が多くなつていました。「どうした、何かあったのか？」と訝るポール先生に、昨日中部教区の主教選挙があり植松司祭が選ばれた旨、報告しました。するとポール先生は満面の笑みで、数少ないポール先生の日本語「お・め・で・とー」を何度も繰り返されました。そして植松司祭をじつと見つめ「あなたはきつと主教に選ばれると思つていた」と親愛の情のこもつた口調でおっしゃいました。「お祈りしましょう」と私は思わず言つてしまいました、が、英語ですらすら祈ることなど出来ません。それで「主の祈りを唱えましょう」と言い換えました。三人は跪いて、ポール先生は英語で私達は日本語で主の祈りを唱えました。ポール先生の声が震えました。植松司祭の目に涙が溢れました。感極まつて私も泣きました。

同じ年つまり一九七六年の十一月十七日に行なわれた植松主教の按手式にはポール先生は出席できませんでしたが、でもあのベッドの上でお祈りくださっていたに違いない…。私はそう思い続けています。



創立十五周年の記念写真（若き日の武藤主教、高田司祭と共に）

今日も鳴っている…聖なる鐘の音が

司祭 マルコ 高田 眞

何よりも、長坂聖マリア教会は、わたしの聖職としての原点です。

執事の時に、岩井克彦主教から遣わされました。武藤六治司祭（当時）の管理のもとでの生活でした。前任牧師は、植松従爾主教さんでした。何よりも、植松主教さんが歩まれた跡を歩むことが出来たらと思っていました。植松主教さんが残されたものを先ず学んで、それに倣うという思いで、長坂での生活を始めました。岩井主教さんからも、その様にアドバイスされたこと記憶しております。指導司祭だった武藤主教さんも、時ある度ごとに植松主教さんのことを本当によくお話しして下さいました。それを聴くのが、その当時何よりも楽しみでした。武藤主教さんご自身も、植松主教の歩まれた道を何よりも大切にされていきました。植松主教から学んだものと、武藤主教との交わりの中で育まれ、司祭としてされていったのではと思います。

そんな中で、頂いた素敵な宝物の一つは、朝、夕の六時に鐘を鳴らして、早晩祈をささげていく生活でした。前任者に倣って、このお祈りの生活を必死に守りました。これは、今でも大事な宝となっています。植松主教は、トランジスター・ラジオや、ベストリーの入り口に置いたラジオにスイッチを入れて、その時報に合わせて鐘を鳴らしていました。わたしも、最初はそれに倣ってやっていましたが、何年か経つうちに、腕時計とか小さな目覚まし時計で鳴らすようになってしまいました。時々寝坊して遅れたこともありました。晩祈も、訪問から帰ってきて少し遅れても「私が鐘を打つ時が、礼拝始まるの時」などと決め、融通無碍に鐘を鳴らす事もありました。しかし、車から降りて慌てて鐘の所まで走って行かねばならないような時もありまし

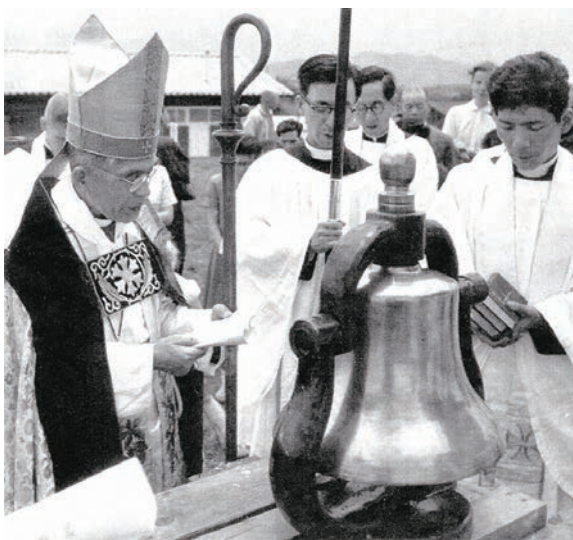
たが、ほとんどの時、ちゃんと時間に合うように鐘を鳴らす事が出来るのです！それが何とも不思議でした。その当時、鐘はベストリーの入口の直ぐ外に在りました。朝夕、四季折々そこから鐘を打ちながら見渡すことのできる様々な自然、周りを囲んでいる山々、夕陽に照らされた金峰、朝日を浴びて雄々しくそそり立つ甲斐駒、星、月、陽の昇る前の白々としてくる空、夕焼け、朝焼けそして、宵の明星、満月、きれいに冴えてる三日月；そんな素敵な自然を見つめながら、鐘を打つのがなんとも至福の時でした。イエスさまのご生涯の年の数三十三回鳴らす事にしていましたが、そんな自然に見とれていると、打っている数を忘れてしまい、覚えている数まで戻って打ち直したものでした（※朝夕の礼拝は、たっぷり四五分。鐘は百回以上鳴っていました。ある朝、寝坊して鐘が鳴り始めて飛び起き、着替えて聖堂に行ったら、まだ鳴っていました。一度だけでしたが…。入江司祭談）。

「さあ、イエス様の事を想い起こす時ですよ！」「イエス様と礼拝をささげましょう！」「イエス様がなされた事を見つめましょう！して下さったお話を聞きましょう！」ことに主日には、「おおい、これから全人類にとつて、最も大切なことが、ここではじまりますよ！」等と勝手に思いながら、そう呼び掛ける様にして打っていました。その様に打ってから聖堂に入っていくと、誰一人会衆がいなくとも、何か自分だけこんな至福の時を与えられている事がもつたいないような、うれしいような思いにいつぱいにされ、毎朝夕の礼拝にあずかっておりました。

主日毎の天のお父さまの家で献げられる聖餐式は、全人類の救いのため、今日も復活の主イエスさまが用意して下さり、「さあいらっしゃい」と招き続けて下さっている食卓です。そしてイエスさまが、今日も豊かにお話をして下さっている時です。この食卓に連なり、感謝と賛美と喜びの内に、これにあずかり、献げていく事は、この地にあつて、この世に向かつて、皆さんが「聖なる鐘」を響かせている事です。どうぞこれからも、そんな素敵な祈りを献げながら、「聖なる鐘」が鳴り響きますようにとお祈りしています。

最後に、何も出来なかった新米司祭を迎え、どんなに信徒さんが忍耐され、苦勞なさったかを振り返りながら、本当にありがとうございましたと、心から感謝を込めて申し上げます。その時にいただいたものが、今もわたしの、司祭としての大切な礎となっています。

主に感謝します！



聖鐘の聖別。野瀬主教、武藤司祭他。



創立 30 周年の記念事業で鐘塔が建てられて、初代の鐘は横浜聖クリストファー教会（横浜市泉区）に移設された

(資料) み告げの祈り

月報アンゼラス第六号(一九六二年一〇月五日)より

毎日、朝の六時と夕方の六時に教会の鐘が鳴ります。礼拝堂ではこの時間に早祷、晩祷が行われるのですが、凡ての信徒がこの時間に唱える短いおいのりを「み告げのいのり」(アンゼラス)と申します。これは聖母マリヤ蒙告日(三月二五日)の特祷ですが、キリスト教の大奥義であるイエス様の受肉降誕と復活に対する日々の信仰をあらわしております。短い祈りですからぜひ暗記して主の祈りと共に、家においても、畑にあつても仕事をしながらでも唱えることが出来る様に致しましょう。

夕暮れの田園になりひびく教会の鐘に、働く手をやめてアンゼラスを唱える農夫達の敬虔な姿をえがいたミレーの「晩鐘」はあまりにも有名であります。いたずらに雑誌やカレンダーの材料にさせておくだけでなく、ぜひとも私達自身の生活になるように心がけましょう。



主よ、天の使の御告げによりて御子イエスキリストの肉体となることを示し給えり。願くは御恵みを我等の心に注ぎ、御子の苦しみと十字架のいさおによりて、そのよみがえりの栄光に至ることを得させ給え。主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

『赤れんが』 ～中高生修養会のことなど

アブラハム 堀内 正基

清里の十二月。冬の寒さはことさら厳しい。午前五時三十分。目覚まし時計のけたたましい音ではつととび起きる。リトリートハウスから教会の聖堂までは五分程度の道のり。まだあたりは暗く冷え込んでいる。霜柱の立つ林の中をさくさくと踏みしめながら、歩を進める。とにかく寒い。そして静寂。眠い目をこすりながら聖堂に向かう。早祷である。

聖堂の畳の上で正座し、黙って祭壇の十字架を見上げる。寒さで足つま先の感覚がなくなってくる。身体が固まってしまい、今度は立つに立てない。早祷の時を告げる教会の鐘。司式者が位置に着く。礼拝が始まる。修養会に参加した中高生の若い声が聖堂に響き渡る。

こんなふうにして中高生修養会の日が始まる。

中高生修養会(キャンプ)は、一九七〇年頃から始まった。当時、長坂の教会に集う中高生は七、八人。既に受洗している者から興味半分に参加している者、単に遊びに来ている者など、集まる動機はそれぞれであったのかもしれない。土曜日の午後(当時は半ドン)三時頃から教会ホールに集まった。聖書研究会であったり、卓球であったり、話し合いであったり、クリスマスカードの再生作業であったりと「熱心に」活動した。修養会はこんな活動の中から生まれた。そして清里や甲府の中高生も仲間に加わった。

中高生で企画から運営まですべて行うこの修養会は、受け身ではなく自分たちで創り上げるものだというある種の自負をもって、はじめの頃は取り組んだように思う。十二月のクリスマス後、三月の春休み、それぞれ二泊三日。場所は清里聖アンデレ教会。早祷、晩祷、終祷の祈りの時間。聖書研究、Q & A (何でも疑問に思ったことを考えよう)、講話(多くの場合、山梨県三



中高生の面々（前列左から3人目が堀内兄）

教会の司祭様方）、黙想など。朝・昼・夕、三度の食事の準備・片づけ（実際は多くの時間を割くことになった）、風呂炊き、掃除など順番に当番を決めた。およそ中高生のやることなので時間を管理するためにタイムキーパーをおいた。焦げたご飯の味だとか、五右衛門風呂の鉄釜の熱さだの、懐かしく思い出される。

中高生修養会には、毎回文集が作られる。修養会の様子や参加者ひとり一人の感想などをのせた。文集の名前は「赤れんが」。清里の教会の赤レンガから来ている。

中高生修養会は、中高生の、中高生による、中高生のための活動などと思っていた。しかし、司祭様をはじめ教会信徒のみなさんの祈りと支えがあつて初めてできたことだと後で気づくことになる。この修養会に参加した当時の中高生は、今、どうしているのだろう。それぞれの道を進んでいるのだろう。でも、ひとりひとりの心のどこかで、あの時の清里の教会の鐘の音が確かに響いているのだと思う。：もう四〇年も前の話である。

「われ山に向かいて目をあげん。わが助けはいざこより来たるべきぞ。」
（詩編第一二二編一節）

坂の上の教会を訪れて

マグダラのマリヤ 佐藤 美子

今からもう三十八年程前のことですが、私はまだ中学生で母の実家が長坂にあり、初めてこの教会を訪れました。坂を登り切ると自然豊かな広々している庭に凜として教会があつた、という感じでしょうか。当時私は山梨英和中に通つていて、聖マリヤ教会の主日礼拝に出席していました。英和中では毎朝礼拝があり、日曜日には教会に行くことを奨励していました。山梨英和中のその習慣は、今でも続いているでしょう。私の中学時代を懐かしく思い出します。

それからしばらく日曜学校の中学生科に通いました。その時の先生は植松功先生で、「ヨハネによる福音書」を学んでいました。地元と同じ年の男子が四人ほどいました。学校の親友と一緒にいたのですが、地元の男子達は、普段も教会に集まつて卓球などして楽しんでいました。功先生は何か清らかな感じがする方だと思ひ、今、私は「祈ること」と「聖書を読むこと」は信仰生活において最も大切なことだと考えているのですが、その基礎は長坂の教会で育まれたものではないかと思ひます。教会に通い始めて一、二年経つて、高田司祭が赴任なさいました。お子さんもまだ小さくて、牧師館によく邪魔したのを懐かしく思い出します。夏は清里の教会と合同でキャンプをしたり、教区の中高生キャンプにも参加しましたが、清里のキャンプ場で行い、楽しい思い出となりました。そして、だんだんと信仰が固まつていき、高校三年の時洗礼、堅信を受けました。



左上が佐藤姉

キャンプにも参加しましたが、清里のキャンプ場で行い、楽しい思い出となりました。そして、だんだんと信仰が固まつていき、高校三年の時洗礼、堅信を受けました。



第一回巡礼 (1972年3月8日)

その後私は進学のため上京し、今の東京聖テモテ教会に籍を移したのですが、信徒と結婚し、妹も信仰に導かれ、娘も今お世話になっています。そして今回母が受洗し、長坂の信徒になり、ここから始まった種が広がっていき、神様の大きな導きとお恵みを感じています。昔懐かしい皆様のお顔を拝見し、長坂聖マリヤ教会がますます豊かに祝福されるようお祈り申し上げます。

イエス様と出会った!

グレース 神林 信のぶ

両親は新潟の出身で、父は東京で大工の棟梁をしていました。一九四五年に知人の誘いを受け、大泉村大開に入植しました。(編注：戦中から戦後にかけて、食糧増産や引揚者の生計確保、失業・治安対策のため、八ヶ岳南麓における開墾・開拓が奨励された。大開に入植した半数は戦災者、半数は引揚者や満州開拓民で、内85%の人は営農経験がなかった。)開拓民への援助は石灰の配布だけで、森を開いて畑にする仕事は辛酸を極めました。水は、雪が積もっている冬の間に、離れた谷川まで水を汲みに行く生活でした。各戸に水道が引かれたのは一九六〇年代です。父を開拓に誘った知人は早々に逃げていきました。家族皆で畑をしましたが、それだけで生計を立てるのは無理で、父は単身東京で仕事をするようになりました。私や弟は肌や髪の色素が少ないうえに親が学校に行くのを許してくれず、姉から読み書きを習いました。悩む事の多い毎日でした。

ある日、大泉駅近くの線路脇に「弘道所」ができたことを知らせるチラシが入りました。最初の集会に一人で行ってみました。植松先生がいらして、聖書のお話を聞き、聖歌を歌いました。人はどのように生まれた者も神さまの似姿に作られていて平等であるというお話で、「私が求めていたのはこれだ!」と思いました。それから集会をいつも楽しみにして、時間前に行くようになりました。植松先生のお話を聞くのが喜びでした。足の不自由な弟の実みの家から背負っていったこともあります。二十二歳の頃は、弘道所では子どもたちを集めて土曜学校が行われ、毎月映画上映会が開かれ、夏になると神学生が来て礼拝が行われていました(弘道所の東面には祭壇がありました)。

弘道所に通い始めたのは三月でした。間もなく、植松先生からイースター礼拝に来ませんかと誘われて、清里聖アンデレ教会にも行くようになりました。受洗を勧められましたが、その時は受けず十一月に受洗しました。大泉の弘道所からは他に二、三人の受洗者が出ました。やがて弟の実みと妹の俊子も清里で洗礼を受けました。実みの洗礼式には母も来てくれました。教会の中でも差別はありました。何年か清里に通いましたが、観光客が増えて弟が列車に乗るのが困難になり、また冬は道が凍って大変だったので、たまたま長坂の町に出たときにマリヤ教会に移られていた喜久江先生とお会いして話をしたところ、教籍がなくても長坂の礼拝に来ていいと言われ、結局、長坂聖マリヤ教会に移ることにしました。興水江つ姉が「よかつたねえ」と喜んで迎えてくれたことを覚えています。



大泉の弘道所



植松主教、高田司祭と共に牛車で天女山登山（79年5月）

初めは汽車で小淵沢経由での通いで大変でした。その内にバスが通うようになりました。当時、長坂の礼拝に出ていた人たちは、長沢や小荒間など、かなりの距離を歩いて通っていたものです。長坂聖マリヤ教会の雰囲気は清里と違って和やかで、みんな物を持っていなくて、持ち寄っていました。清里聖アンデレ教会では、センターの人、駅前の人、清里の人などでグループができていて、大泉など少し離れたところに住む信徒はよそ者扱いされている感じがありました。

長坂での思い出のひとつは「巡礼」です。植松先生に、教会学校の子どもたちはあちこちに行く機会があるけれど、大人には機会がないこと、教区の大家族キャンプは農家が忙しい夏に行われるので長坂の信徒の多くは参加できないことなどを話したところ、では冬に、教区の諸教会を巡る旅をしましょうということになりました。長坂や清里で洗礼を受けた人が主教座聖堂で堅信式をうけるのに同伴して、その後一緒に教区の諸教会をめぐるそれぞれ

の教会でお話を聞きました。この巡礼は十一回行われました。教会の行事の他にも、高田先生のご家族と一緒に長坂の夏祭りの花火を楽しんだり、天女山に登ったりしました。天女山には、実と高田先生のお子さんたちを牛車に乗せて登りました。ちょうどその日、中部教区の主教になられていた植松先生がたまたま長坂にいらして、ワイシャツ、革靴の姿で参加されました。どれも楽しい思い出です。

共に居てくださる復活の主イエスキさまにお祈りしながら

マルタ 内山 明子

長坂の地から望む富士山、八ヶ岳、南アルプス、甲斐駒ヶ岳。私の生まれ育った清里で見えるのと同じ雄大な山々。四季折々の風景。山の頂きに雪化粧、下は新緑の頃の景色、雪解け水の恵みで草木も芽吹き、小川のせせらぎ、小鳥のさえずり。一番好きな時の流れです。

何もない時代、冬は田んぼに水を張ってもらい凍らせてヒモスケート、雪が降るとヒモスキーで遊びました。清里の聖アンデレ教会の日曜学校に兄弟姉妹と両親と礼拝に行くのが楽しみでした。植松牧師さん、奥様の女医先生には、いつも優しいまなざしで、お声をかけていただきました。奥様のオルガンを弾きながらの讃美歌の歌声が素晴らしく、子どもで音痴な私もつられて歌っていました。今でもはつきり覚えています。兄弟とも時々思い出話しております。

その後東京に出てからは殆ど教会に行ってませんでした。近くの教会の前を通りますと礼拝に行っていないなあーと思いつつ月日が過ぎました。

その頃両親が長坂に引越して、私も二年ほど居まして、東京と長坂を行ったり来たりしていました。まもなく長坂聖マリヤ教会が建てられまして、植松牧師さんが転勤で来られ、お逢いすることになりました。両親とたまに礼拝に行きました。今も時々ですが。

私の人生も順風満帆ではなかったです。

父、ヨセフ金原萬吉（金国萬、キムクワン）の初代教会委員の仕事は山梨県の土木関係の請負で外の仕事がほとんどで、兄弟達が育ち盛りに日射病になりました。終戦後医療もまだ良くなく、薬も少なく、アメリカの薬は高価すぎて、と母

が言っていました。母が働いて私達を育ててくれました。父も母の献身的な介護により快復し、天国に旅立ちました。

洗礼・堅信を、母、ベタニヤのマリヤ清子（申順点^{シンスンジュエマ}）と一緒に当教会であ
ずかり、神の子に。

静寂の中で緊張と喜びと感謝の気持ちで胸が熱くなりました。母も嬉し
さで、とても良い顔をしていました。礼拝堂の十字架に日の光がさして、た
ざわわっていた方達と共に祝福してくれているように思いました。

元氣な母でしたが、七十二歳の時に肺がんの手術。その後も他の病いに悩
まされながらも、氣丈に生き、九十二歳の生涯を…。

夫、貢輔も難病のパーキンソン病に五十三歳頃より。元氣が見本みたいな
人でしたが、治す薬もなく、病いの戦いが始まりました。本人もつらかつた
でしょうが…。

家族に病人が居ますと、落ち込むことも多々ありました。でも何となく、
助けてくださる誰かがそばに居るような気がしてなりません。神の愛
とお導きがあったような、そんな日々でした。母もよく、守ってくださいる方
がいるみたいと話されていました。

夫も病者の洗礼にあずかり、神に召されました。

「悲しみから逃げずに、乗り越えたときこそ、私達は成長します」

（日野原重明）

神様の恩寵、ご加護に感謝して、共に居てくださいる復活の主イエスさまに
お祈りしながら、前向きに。

ひ孫と一緒に教会に行く日を楽しみに

ルデヤ 瀬戸 けさ子



私は患者として医師であった喜久江先生に
出会って教会に導かれました。清里聖ルカ診
療所が小荒間から一番近い診療所でした。今
年八九歳になりますから、三〇代後半の頃で
す。植松先生ご一家が長坂に移られるちよつ
と前のことで、聖アンデレ教会には数える程
しか行っておりません。教会に行くことを反対されるようなことはありませ
んでした。後には夫や娘たちも教会に行くようになりました。

長坂の教会へは、喜久江先生と二人で清里から甲斐小泉まで小海線に乗り、
そこから歩いて行つたのが最初です。牧師館には裏から出入りしていました。
中にはストーブが一つありました。今の牧師館に建て替えられる前には、も
う本当に古くなっていました。初めの頃は教会員は農家が多く、礼拝に来る
人は少なかつたです。一緒に食事をしたり、お話しをしたりして楽しい教会
生活でした。聖歌はどれも好きですが、「いつくしみふかきともなるイエスは
…」(聖歌482番)が一番好きです。最初の頃は小荒間から一人で歩いて礼
拝に通いました(※教会まで片道四・七キロ)。

誠さんが中学生の頃は、夏休みなどに、よく功さんをつれて畑の手伝いに
来てくれました。大根が沢山できたときには、市場に出すために畑の合間の
道を本道まで運んでくれたこともありました。

保育園に通っているひ孫がもう少し大きくなったら、一緒に教会に行きた
いです。

イエスさまに出会ってしまった

ユニケ 前島 保子

私が今から六五年位前の中学生のある日、明治三二年に高遠で生まれた母の本棚より、小さな聖書を見付けた。開いた所が、マタイによる福音書第五章、「心の貧しい者はさいわいなり。」

後年、植松主教様によると、中国経由で翻訳された聖書との事。そして、『パレアナ』（エレナ・ポーター著、村岡花子訳）の単行本を、見付けたのです。母に詳しく聞いたがまったく覚えていない。とに角友だちにどんどん貸してあげ、とうとう行方不明になって仕舞った。自分が母親になって、文庫本になった本を入手した時は、宝物が帰って来た嬉しさでした。この事によって、イエス・キリスト様に初めて出会ったのです。

中卒で富士見の洋裁学校、夜間定時制高校、四年のうち、富士見高原教会があるを知り、初めて門をくぐった日、賀川豊彦先生の講演があり、「神は愛なり」と「愛をば」の賛美歌を覚ええました。母が私に残して呉れたものは、今思うと、絶対に大事な大切な宝物だった、と。

長男の召命の前後に主人が植松主教、喜久江先生に何度もお会いして、宗教というより、人間にすっかり参って仕舞い、一年後のクリスマスに受洗した事は、主の為された事。

家族皆で教会に出席出来る事の喜びは一番の感謝です。

次々の辛い苦しい試練は、友の事を自分の事のように解るようになって下さる恵みと、パレアナの「喜びの遊び」に通ずる原点になっていると思つて居ります。

早朝のウォーキングで、大自然に慰められ、主人の介護が続けられるよう、祈りつつ、歌いつつ、主に深く感謝します。



2010年11月14日、主日礼拝を初代牧師 植松従爾主教、喜久江夫人と共に献げて

(資料) たけふみちゃんの十字架

司祭 細貝岩夫

(一九七三年に十一歳で天に帰ったダビデ前島武文ちゃんの闘病の姿における証しを、細貝司祭が一九八一年に東京教区三光教会にて大斎講話で話し、その原稿を元に小冊子を発行されました。以下は、その再録です。)

大斎節も終わりに近く、ここに受難の主口を迎え、この最後の二週間、わたしたちの思いは専ら主の十字架に集中しようとしております。

このときに当り、みなさんと共に、ひとりの少年、自らの苦しみを通してよく主の十字架を理解したひとりの少年の短い生涯のあとを、そのお母さんがつくられた記憶をたどりながら学び、わたしたちの信仰の励ましといたしたいと存じます。

八ヶ岳山麓の清里にゆきますには、新宿から急行にのり、小淵沢で小海線にのりかえるのですが、その一つ手前に長坂という急行のとまらない小さな駅があります。長坂は附近の農村の中心として発達した町で、聖公会では清里聖アンデレ教会の姉妹教会として昭和三十七年六月ここに長坂聖マリヤ教会が誕生し、植松従爾司祭(現中部教区主教)が最初から主任司祭として定住し、牧会傳道に当ってこられました。植松司祭夫人の喜久江さんは女医で、そこから清里聖ルカ病院に通っておられました。

その長坂の町に精巧堂という大きな時計店があつて、前島毅さんはその精巧堂に勤務する一級時計修理士ですが、昭和三十七年二月十二日、奥さんの保子さんとの間に長男が生まれ、その子に武文(たけふみ)という名をつけました。

武文ちゃんは、ごく普通の男の子で、昭和四十三年に町の小学校に入学しましたが、お母さんの記録によると、「内蔵丈夫、風邪にも強い、運動神経普通、頭脳普通、好きな学科は理科、社会、音楽、好きなことは手で工夫して遊びを作る、架空の地図を書く、設計図を書く」とあります。

二年生のとき、友達といっしょに長坂聖マリヤ教会の日曜学校に通うようになりました。休まず、日曜毎に通ったということです。

昭和四十七年、五年生の夏、正確にいいますと八月十九日の朝、起き出すと嘔吐し、頭痛を訴えました。そして毎日それが続き、両親は心配しているいる専門医にみてもらいましたが、よく原因がわかりませんでした。植松女医さんは脳腫瘍を疑っていたとのことでした。

結局、十月二十六日になって甲府の県立中央病院に入院、検査を受け、手術をすることになりました。そして、十一月二十九日の手術に先立ち、前々日に病室で植松司祭から洗礼をうけ、ダビデの教名がつけられました。

手術の結果、小脳の真中に小児ガンが発見されたそうですが、除去することができず、手当次第で一時的に元気になることはあっても、余命一年位との宣告をうけました。

そして、やがて間もなくガンの転移が始まり、十二月二十日には下肢が痛み出しました。十二月二十五日、クリスマスの日は一日苦しかった、子と母と祈り歌う、との記録があります。

十二月二十九日。「イエスさま苦しかったヨネ、ぼくより苦しかったヨ」と泣く、とありますが、武文ちゃんの中では、その苦痛が、自然に主イエスの十字架のおくるしみと結びついていたのでした。

しかし、武文ちゃんのすばらしさは、そうした苦痛の中で、いつも明るかったということで、しばしば病床を訪問していた植松司祭は「実に明るくて、いつもこっちはげまされてしまつて」といつておられました。

年を越してやや病状が落ち着き、三月十六日に一時退院し帰宅することになりました。「これから教会にゆける」といつてたのしそつたといふことです。

そして、四月二十二日のイースターには、お母さんの保子さんと妹の久美子ちゃんが洗礼をうけ、五月六日に武文ちゃんはお母さんといっしょに岩井横浜教区主教から堅信をいただくことができました。

そんな間にも転移が進んでいたようで、五月二十八日、両足激痛、泣く、とあります。そんなときはいつも「イエスさま足が痛いからだつこして下さい」と祈っていたそうです。

七月三日。ふとんやいすをたたき、泣き祈る、とあり、「ひとりになつて思い切り泣きたい」「世界中の病人のために祈る」とあります。

武文ちゃんの病室には脳外科のひどい患者が多く、思いやりの深い武文ちゃんは、自分のためだけでなく、それらの病人のため、いつも代禱しておりましたが、その祈りは広く世界中の病人の上にも及び、代禱の範囲は無限にひろがってゆきました。

七月十日になんどもかの入院。結局それが、最後の入院となつたのですが、病勢は一段と進んで行きました。しかし武文ちゃんは元氣にがんばりました。

丁度その頃清里で横浜教区のユースキャンプがあり、講師として参加していたわたしは、七月二十九日の主日、長坂聖マリヤ教会を訪問してその

礼拝に出席し、その日の説教で、はからずも武文ちゃんのことをきき、深い感動をおぼえました。八月七日の記録に、細貝牧師さんからの手紙、声を出して読む、助けられた、とありますが、当時千葉県の田舎にいたわたしは、武文ちゃんにげきれいの手紙を書いたのです。しばらくしてお母さんから心のこもつたお返事をいただいたことを記憶しております。

十月四日。夕方笑顔出る。母の顔のホクロを指して「十字架の型にあるね。まがつているけど」といい、「みんな生きている限り悪魔と斗わねばならないネ」、「お医者さんと病人は病気の悪魔と斗うんだ」、「イエスさまのいる天国は悪魔がいらないだろうね」と言つ、とあります。武文ちゃんは本当によくがんばつて病気の悪魔と斗つたのです。敢斗悔いなしです。

十月二十日。「イエスさまはごはんを食べてごちそうさまいつているかな」、「イエスさまの胸の傷治つたかな」といつたとありますが、これは数ある武文ちゃんの残した名言の中でも最高のものといわれています。

十一月十八日。「もっと広いところへ行きたい、ここから出たい」とあるのは神さまのお召しに対する答えのようにも思われます。

そして、その年のクリスマスの夜、わたしは植松司祭から電話をいただきました。その日の午前二時三十分、武文ちゃんをご両親と植松司祭に見守られながら召されたといふお知らせでした。

「そうでしたか。クリスマスの日にね」とわたし。「そうですね。武文やつた、という感じですよ」と植松司祭。

葬儀は十二月二十七日午後二時、長坂聖マリヤ教会で行われるとのこと、わたしはどうしても行かずにはいられない気持ちになり、病人の聖餐のやりくりをつけてその朝長坂に向いました。

いすのない聖堂にいったいの会衆でした。武文ちゃんの愛誦した聖歌「主にしたがいゆくは」「主われをあいす」「よろこべや たたえよや」等がうたわれました。その「よろこべや」はなかに武文ちゃんの教名ダビデがでてくるので特別親近感をもっていて、よく病室で歌っていたということです。

涙は自然に流れても、決して悲しくない、本当に明るい空気のいっぱいな不思議な葬儀でした。

一年四ヶ月に亘るお母さんの記録は次の言葉で結ばれていました。「悪魔と斗って肉体はぼろぼろになったが、精神は神様によるこぼれる子どもだったと思います。どうぞダビデ武文をイエスさまだっこして下さい。武文を通してすべての事に感謝です」と。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」(ヨハネ十二の二十四)とのみ言葉通り、お父さんの毅さんも次の年のクリスマスに洗礼をうけました。そして現在教会委員や教区会代議員をしており、お母さんの保子さんは日曜学校の先生で、家族中が熱心に教会生活にはげんでおります。伯母さんのひとりも洗礼をうけました。

なくなつた年のお誕生日二月十二日に、「大人になつたらお父さんとお母さんをうんと大事にする」とくりかえしいつていたという武文ちゃんでしたが、お母さんはそれに答えるように「武文がうんとうんと親孝行するからねと言いましたね。お父さんお母さん、くみちゃんをイエスさまに紹介して、体で親孝行出来なくても、心で、いえ自分の体をなげだして呉れましたね」と。

入院中から武文ちゃんのことを伝えきいて大勢の人びとが励まされてきました。わたしももちろん武文ちゃんのファンで、大ファンで、ひとりでも多くの方々に武文ちゃんのことを知っていただきたいと思っています。

主イエスは「だれでもわたしについていきたいと思つたら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」(マタイ十六の二十四)とおっしゃいました。わたしたちは武文ちゃんにはげまされて、めいめいに与えられた十字架を背負い、どこまでも主イエスに従って行くこつではありませんか。



いろり火

ヨハンナ 興水 江つ

祈りつつ 泣きつついねて いつしかに
夢の御国は 楽しかりける

山菜の夕餉 樂しきひとときは
讚美歌なども 共に歌ひて

幾日振り 御堂に聖餐を 受け居れば
イエス君の愛ひしひと迫る

我れどここの花水木 見るたびに
守りあるを 信じて生きよ

食前も 食後も 祈り 主にまして
耐え来し道を 共に語りぬ

聖日を ベッドに伏して はるかなる
長坂聖マリヤの 礼拝を憶ふ

十字架の花の伝説 聞きしより
なぜか ひかるこの花にして

水仙の 揃ひ咲きせし 枕辺に
聖書ひもとく 朝のひととき

朝まだき 白衣の司祭 我がために
病床聖餐 受けさせ給ふ

赤き実も 花も葉もよし 花水木
御堂守りて 四季に美し

冬空に 仰ぐ十字の 塔 冴えて
窓辺より 漏る 潔き歌声

夫と子と 孫たちと 友と 師の君の
祈りのうちに 我癒されぬ

いけにえの キリストの 血を 偲ばせて
白き十字に 紅に じむ

罪に染む 心 潔めよとの 如く
前宵祭に 白雪の 降る

七人の 友それぞれに 主に 生きて
十字架の道 歩みて ありし

胸に切る 十字花の 如き 花びらを
痛き心に じつと 見つむる

無限なる プレゼントなり 今日この日
神僕らに 主イエスを 給ふ





1977年～2004年

一つの行事の思い

司祭 マツテヤ 大澤 克次

創立五十周年のお祝いを申し上げます。

青天にそびえたつ甲斐駒、夜空に輝く満点の星・・・等、長坂を思い出すと、多くの名場面が浮かんで来ます。教会の五十年の歩みの中にも数多くの感謝すべきことが受けとめられるでしょうが、ここでは小生が経験させて頂いた一つの行事について記させて頂きます。

現在の日本聖公会祈祷書は一九九〇年に認可されました。小生が長坂に赴任した時期は新しい祈祷書の試用版が用いられ、聖餐式も会衆と司祭が聖卓を前にして対面するよう型でささげられるようになっていました。文語の旧祈祷書に比べて、一同が共同体として行動的に礼拝に参加するように導かれて来た時期といえましょう。聖餐式前半の「み言葉」の部分の終りで共同でささげる「代祷」部分にも、新しい祈祷書の特徴がよく示されています。ここで思い出しますのは一九八五年から数年行った「平和祈念ミサ」です。ド



平和記念講演会

イツの大統領が戦後の四十年をふり返って「荒野の四十年」という有名な演説を行いました。旧約の信仰の民は荒野の四十年の経験を中心に刻むことを通して平和の道を学んだことを指摘しました。この預言者の演説に呼応して長坂では八月十五日の終戦記念日に近い主日に、平和をつくり出す人々のための特祷をささげ、ヒロシマ、ナガサキを含めた戦後犠牲者を代祷の中で覚ええました。共同体として行動的に聖餐に参加することとの

中に、社会の重大な響きに共鳴する側面が含まれていると考えた次第です。しかしこのような特別な行事でなくとも、主日礼拝のあとの「マリア・カレー」のように、地味で隠れた偉大な行事が沢山あります。

神の恵みと摂理を仰ぐという点では、四十年も五十年も同じですから、五十周年の記念を通して、長坂の教会の皆さんの上に、「荒野の四十年」の信仰の民が受けた恵みと導きが豊かでありますようにお祈り申し上げます。

二〇二一年十一月二十五日、記す

長坂聖マリヤ教会での思い出

司祭 ルカ 片山 謙

長坂聖マリヤ教会の皆さん、教会創立五〇周年、おめでとうございます。

私が初めて長坂の教会にお世話になったのは一九九二年、大学二年生の夏休み、前年に神戸教区の研修会でお会いした梶原主教様から横浜教区の召命黙想会へ参加するようお招きいただきました。新幹線に乗るお金はなく、各駅停車で長坂へ向けて出発しました。ところが、乗り換えするはずの大垣駅で、次々にホームの灯りが消えていき、腕時計を見るとなんと一時間時計がずれており、既に乗る予定の電車は出ていました。その日は自分の誕生日だったので、大垣駅で野宿することになり、翌朝、始発電車に乗り、中央線に乗り換え、結果的に予定より早く長坂の教会に着きました。当時、牧師は大澤司祭さんで、「遠いのに、早く来たね。」と言われ、事の次第を話すと大笑いされたことを思い出します。

その後、神学校一年生（一九九六年）の時、夏期勤務でお世話になりました。



神学生時代の片山司祭

私だけでなく、当時ほとんどの神学生が夏期勤務で長坂にお世話になったと思います。当時、牧師をされていたのは古川司祭さんで、毎年神学生に勤務中の課題を予めご用意くださいました。ある者は看板の一部、ある者は花壇と作業が与えられ、司祭さんから「あれは、〇〇神学生の作品だよ。ホッポホッ」と紹介されました。三週間の夏期勤務の初日に幅一二〇cm、縦三〇cm程の木の板とノミ一本と金槌が司祭さんから手渡され、「ここに、英語で長坂聖マリヤ教会と彫ってください」と言われ、早速、二日目に着手しました。しかし、このノミが彫れない。切れ味が最悪で、難儀していたその時、たまたま大工さんが現れ、彫れないノミで板に向かっていた私の前に切れ味抜群の道具を広げ、「好きな使って」と一言。能率だけでなく、精度も上がり、思ったより早く仕上げることができました。

もう一つ思い出すのは、主日聖餐式終了後、信徒の方々に講話をするように指示されたことです。一回目は大学時代取り組んだ、マリア論について。二回目は大学時代に経験した阪神淡路大震災での避難所生活について。驚いたのは信徒の方々が真剣に話を聞いてくださり、色々と質問されたことです。今、考えますと極めて実践的な実習であったように思います。

実習中はほぼ毎日、信徒の方々が代わる代わる顔を出してください、美味しいものもたくさんいただきました。私は他の教区で育ちましたが、始めに記したように、横浜教区の教会で初めて泊まったのは長坂で、初めての夏期勤務が長坂であると聞いた時に嬉しかったことを覚えています。私を含め当時、夏期勤務を長坂でお世話になった聖職たちはおそらく、私と同じような懐かしい思いをもっていることと思います。長坂聖マリヤ教会これからの歩みのために祈っております。

愛餐会について

ヨハンナ 浅川 安子

長坂聖マリヤ教会が、聖別された一九六二年頃は、未だ家用自動車は珍しく、交通不便な当地では、遠方から主日礼拝に出席する信徒の為に、司祭夫人植松喜久江先生のご厚意で、毎週昼のカレーが用意されていたようです。教会の近くに住む私は、平素は礼拝が終わると直ぐ帰宅し、一品持ち寄りの年三回の祝会にだけ参加させて頂いておりました。

一九七六年に、植松司祭様が、中部教区主教として名古屋に移転された時、喜久江先生のお気持ちを継いで、婦人会がマリヤカレーの愛餐会を始めました。カレーも作る人によって味が微妙に異なるのも楽しみでしたが、何より主にある兄弟姉妹が、互いに知り合い、人間関係を深める大切な場だと感じました。献立がカレーと決まると、一年分のじゃが芋を生産して下さる人、お米の寄付も有り、一食二〇〇円（現在は三〇〇円）は、愛餐会会計として少しずつ貯えられ、教会の車購入時等、臨時の支出に役立つ事が出来ました。



新会館での愛餐会風景

然し、三〇年、四〇年と続くうちには、信徒の変化や加齢も有り、作る人は、年々少なくなってしまうました。その様な時に、教会会館や、司祭館建て替えの話が進み、暫くガス、水道が使えなくなり、その時思いついたのは、食器も使わないおにぎりや、サンドイッチを当番が家庭で作ってきて、礼拝後、聖堂の片隅でテーブルを囲む事でした。

こうして、週一度の愛餐会が、継続できた事と、朝、家事もしながら教会の準備

備もする安易さに気付きました。新しい会館が聖別されて、炊事室も整いましたが、現在は家庭で準備してくる愛餐会が、続いています。献立もカレーに限らず、家庭にある食材を生かして、変化のあるものになりました。他教会から訪ねられる方々が、毎週愛餐会が有る事に感心する声を聞く昨今です。幸い新しい料理者にも恵まれました。この良き風習が、今後も長く続き、宣教に役立つ事が出来たらと願っております。主に感謝。

五〇年の教会生活とハナミズキ

パウロ 前島 毅・ユニケ 保子

当教会が創立された一九六二年その年、奇しくも出生した長男武文が、二年生の時から友達と共に楽しく日曜学校に通っていたが、脳腫瘍となり、二年後の十一歳のクリスマス早朝、ダビデ武文として天国に迎えられました。その折は司祭ご夫妻はじめ、皆様に大変お世話になりました。息子によってイエス様に出会えた毅は、一年後のクリスマスに受洗し、私共家族は、パウロ毅、ユニケ保子、長女アグネス久美子として毎主日礼拝に出席するようになり、その喜びは何よりの生き甲斐となりました。

その後、毅は四〇年の仕事を終え、当教会のシンボルとなっているハナミズキの生育と品種改良に努力してまいりました。そして二〇〇九年、本件の前任の白倉昇進さんの纏められた冊子「花水木の由来」を再版しましたので、ここにその一部を書き留めてみたいと思います。

以下『ハナミズキの由来』より引用

「主イエス・キリスト様の十字架を思い起こさせてくれる慈しみ溢れる感動的な言い伝えを持つハナミズキの苗が、長坂聖マリヤ教会の庭に植えられてから早四十六年が経ちました。そしてそのハナミズキをこよなく愛し、育成に尽力された白倉昇進さん（一九八一年逝去）が一九七六年に植松従爾主教（当時司祭）のご指導の下で、「花水木の由来」という小冊子を出してから三十三年の歳月を数えました。子供たちは大きくなり、私共は老齢となり、長坂聖マリヤ教会のハナミズキの歴史を知る人も、



1999年5月、境内地にて、ハナミズキの花見会

語る人も次第に少なくなりました。奇しくもこの度、長坂聖マリヤ教会の教会報が、「ハナミズキ」と名づけられたのを機に、「花水木の由来」の再版を思い立ちました。（中略）教会のハナミズキは私共夫婦にとつて、一九七三年のクリスマス早朝に天国に召された息子ダビデ武文と固く結びついています。日曜学校に行くのが何よりの楽しみで、ハナミズキの木の下でイエス様のお話を聞き、そして私共家族をイエス様のもとに導いて下さったのです。この武文の思い出も、「花水木の由来」再版の動機となっております。長坂聖マリヤ教会のハナミズキは、今もその季節には豊かな花を咲かせ、秋には美しい紅葉と赤い実で神様を賛美しています。どうか、私共の愛する長坂聖マリヤ教会のハナミズキが、みんなの協力によっていつまでも、いつまでもその姿を失わないで欲しい、心からそう願い、祈って止みません。主に感謝。

二〇〇九年四月十二日 イースターの日に パウロ 前島 毅



2012年5月、長坂聖マリヤ教会のハナミズキ

一九六三年、米国ノース・キャロライナ州からキーブ協会に寄贈されたハナミズキが、この地長坂で見事に友情の証として実を結び、現在も尚、地域の皆様が、その維持管理にご尽力下さる事に感謝申し上げますと共に、当教会で素晴らしい隣人方に出会い、共に過ごせる事を感じたいします。

「キリストの平和が、私達の心の隅々にまで行き渡ります様に」と口ずさみつつ。

マリヤ教会のハナミズキ

トマス 植月 躋

月日の経つのは早いもので教会のハナミズキの絵を描いてから一五年になる。一九九七年の五月五日私は教会の庭に三脚を立てキャンパスをつけた。空は青く薄らと霽がかり、南アルプス、鳳凰三山が雪を戴いて遠く霞んでいる。ハナミズキは満開でピンクと白の花は匂うがごとく咲き満ちている。

地には浅緑の草、草、黄色のタンポポ、見るもの総てが初々しい。暫し春の気を満喫して筆をとる。キャンパスに筆を下ろすと、もう無我の境、陽が西に傾く頃、筆を描く。数日通って絵を完成させる。数年かよって数枚の絵を制作、そのうちの一枚を、植松喜久江先生に贈呈する。植松従爾主教ご夫妻とは直接の交際はないがご夫妻の清里、大泉での御事蹟は人々から聞いて熟知していたので、昔を偲ぶよすがにとお送りした。これに対しての喜久江先生からのお礼状は懐旧の情と感謝の念に満ちたもので、その言葉に私は感激し絵を描いてきて良かったなと思ったものである。私にとって教会のハナミズキは特別思い入れのあるものである。

思い出深い長坂の信徒さん達

司祭 イマヌエル 古川 潤児

長坂聖マリヤ教会の牧師としての拜命は、一九九四年三月二十九日より二〇〇〇年八月三十一日までの六カ年となります。梶原主教様の時代です。前任者は、大澤克次司祭様でした。さて、私の記憶に残る最初の出会いには、パウロ前島毅兄より始まります。当時彼は元気で（今でもそうですが）旧牧師館の周りの草（山吹）を刈ってくださいました。ともかく一生懸命で、朝晩良くやってくださいました。感謝です。

その次に出会った方は、イサク相山富夫兄（故人）と奥様のリベカ幸恵姉（故人）でした。

私はその頃、聖堂のオルガン（ハモンド旧タイプ）の配線が余りみつともない状態でしたので、その修理に取り掛かっておりました。その時、至聖所の二〇〇Wの間接照明の御願いしたのが「とうちゃん」と呼ばれていた相山兄で、その動作の確実性、手早くまとめあげる能力には感心してしまいました。



た。又奥様の幸恵姉に関しては、当時教会の周りの臭気対策として風向、風力等書き留めておりました折、数百メートル先にお住まいだった幸恵さんより、教会の鐘が風向きによつては聞こえると聞かされ、鐘をもつと良く鳴らさねばと反省させられました。

又、浅川さんご夫妻も、私にとっては印象深い方々です。トマス浅川敏兄を私は何時も、彼のご性格から、手回し蓄音機のガバナ―に喩えて、他の方にご紹介したものでした。又奥様のヨハンナ安子姉は、私の母教会である横浜山手聖公会の会堂にあったオルガンが変更されるについて、そのオルガンを即断即決で当教会に貰い受けてきた事は、忘れ難い思い出です。

マリヤ白倉岩子姉（故人）の篤き信仰にも一言触れる必要があるでしょう。彼女は若き頃、働いた製糸工場で信仰に目覚め、賛美歌二一、四六六番の「山路越え 一人行けど、主の手にすがる身はやすけし」を六番まで、彼女の生涯をこの歌に重ね合わせてお歌いになっていたのは、素晴らしい信仰心と感じ入ったものでした。

最後に、日曜学校の生徒を督励し、見事なステンドグラスを作り、クリスマス礼拝を可能にしてくれたヨセフ佐野紀人兄にも感謝申し上げます。ねばなりません。何れかの機会に、又日曜学校の生徒の手で作られたステンドグラスでクリスマスがお祝いできたらと念じる日々です。

最後に私の事も話さねばなりません。私はフランススコ会聖書研究所より「聖書」が発行されたのを機に、聖書をもう一度読んでみたいと思ふようになり、マタイによる福音書から始める事になりました。今読んでいるところは、新約聖書の「福なる者は、霊において貧しきもの



1996年、韮崎市わに塚にて、お花見遠足

「、自分の貧しきを知る人は、幸いである」、心の貧しい人は、幸いである」、「唯神により頼む人は、幸いだ」、「ああ幸いだ、神によりすがる『貧しい人達』」、「幸福なるかな、心の貧しい人」、七の二七までの、いわゆる「山上の垂訓」です。これを読んで感じる事は、私は現時点で、とても「幸い」にはなれない。もし「幸い」といわれるならば、その時は、死ぬ時である、と感じざるを得ない。しかし全てのクリスチャンは、あの「洗礼」の時に既に死んでいる。何故なら、「愛する兄弟よ、我らの救い主キリストの教え給いしごとく、人は水と霊によりて、新たに生まれざれば、神の国に入ることあたはず。故に、汝ら父なる神に祈り、この人々を憐れみ、その生まれつかぬものを与え、水と霊との洗礼を授けキリストの聖公会に入れ、その生きたる枝となしたまわん事をひたすらねこうべし」と洗礼の時に「勧告」されているからです。

日曜日に教会を出る時に、「ハレルヤ」と言うのですものね。聖堂の中では、ほめたとうるべきものは、唯一つイエス・キリストのみであるのでしょうか。

祭壇の花と私

ドロテア 古川 敬世

長坂の教会に来て、前任者の牧師夫人から、「クリスマスとイースターだけお花を買ってもよいの。普段は買はないで、庭の花を活けるの。活けるお花がなくて、はなみづきの紅葉の葉を活けたときがあったわ」と話して下さった。広い庭だからコスモスの種など蒔いた。上手にお花を作っている人何人かに、祭壇に活けるお花をお願いした。

今までの教会は花屋さんに行つて祭壇に映える花を選ぶのは一苦勞だった。庭には、山吹き、水仙、こてまり、あやめの種類が次々咲いてくれた。

真白い見事に咲く梨の花を活けたかったが、木が高過ぎて駄目だった。

藤色の大きい房の藤の花を活けて、得意気になって居た私、朝六時の早朝聖餐の前にみたら水揚げしないで枯れていた。

イースターに百合の花を買つてきて活けた。寒い寒いイースターだった。花瓶ごと凍つてしまつて、百合の花は下を向いてたれている。礼拝が終わる頃礼拝堂の温度が上がつて、百合の花は上を向いてくれた。

聖霊降臨日の日、神林さんをお願いしてあつた真赤なしゃくなげを活けることができた。

聖書の言葉「炎のような…」聖霊降臨日にぴったり満開になって咲いてくれるとは、嬉しかった。今、お花を活けて下さっている方、私と同じように野の花、庭の花を活けて下さっている。

今週も買わないで活けるお花があつたと活けて下さっている姿を私は想像してしまふ。

讃美歌を歌う会の思い出

フローレンス 植月 美代子

音楽が大好きな古川先生と奥様の御発案で「讃美歌を歌う会」がここ長坂聖マリヤ教会で一九九五年に発足しました。「讃美歌をうたうのがお好きな方なら、どなたでも御参加下さい」と言う事で、他の教会の女性の方も、未信者の方も、自由に参加してくださいました。会のご指導をひきうけてくださったのは、高校の音楽の先生をしていらつした西岡誠先生でした。

練習場所は、マリヤ教会の他にも、西岡先生のご自宅のピアノ室を使わせていただいたり、他にも、個人のお宅だったり、ペンション・ファームインの音楽ホールだったり、清春のルオー礼拝堂をお借りしたりして行われました。ペンション・ファームリーで音楽室をお借りする時にはペンションで昼食を作ってください、それがとてもおいしくて、皆で喜んでいただいたりもしました。

また、佐野さんから絵を習っていらつした七〇歳を過ぎたご高齢の方お二人も参加されて、お若い時に東京で聖公会に通つていらつしたとの事、なつかしがつて御一緒に讃美歌を歌つて下さったこともありました。

清春の美術館の礼拝堂を使わせていただいた時には西岡先生がパイプオルガンで伴奏をして下さいました。

この会が五〇回続いた後で閉じることになり、津金の大正時代の古い校舎で最後の練習の会が行われる事になり、その時に「おいしい学校」でお昼をいただいてから、皆で讃美歌を歌いました。そのとき初参加された藤田さんが後に洗礼をおうけになられたことはとても嬉しい事でした。

心の詩

アンデレ 神林 実

† みんなは

心の明かりをともしている
あたたかい明かりは
神さまがいるから
輝いている明かりは
みんなを招いている
冷たく光っている明かりは
ひとりでいるから
わたしはどうだろう
もつと明るくともそう
みんなといっしょだから。

† 若葉がまぶしい

新しい命が
たくさん生まれた
私も
生きよう
この若葉のように
明るいほうへ
歩きだそう



† 光の中に

まぶしいあの人を見た
静かに私を見つめていた
心の中に
私を受け入れた者は
私を信じたのである
とその人は言う
神を讃えよう
神を賛美しよう
喜びと愛をもつて

† 丘の上の小さな家

それは私たちの集まるところ
幼子のように
神に祈るところ
神と共に語り合うところ
苦しみをやわらげてくださる
悲しみをいやしてくださる
希望をくださる
あなたも私たちと共に
あの丘の上の
小さな教会へ行こう



2005年～2012年

地域に開かれた教会としての長坂聖マリヤ教会

司祭 オーガスチン 松村 誠

私の在任した一九九八年から二〇〇八年の間は、長坂聖マリヤ教会にとっても大きな変化を迎えた時代であったと思います。最も大きな出来事は、二〇〇五年に実施した、会館と司祭館の改築に向けての一連の活動でした。

ポール・ラッシュ博士の息吹を受けて一九六二年に建築され四〇年を経た教会は、ことに会館と司祭館の老朽化が著しく、この二つの建物をどのように建て直してゆくかについて、何度も協議を重ねて建築に臨みました。

信徒のほとんどが高齢者であり、財政的にも厳しい、小さな教会が多額の負債を負う教会建築に踏み切るには大きな困難が伴い、勇気を必要としました。しかし、宣教的視点の中から、長坂聖マリヤ教会の果たすべき働きを考えた時、教会を単に在籍信徒のためだけでなく、地域のすべての人のために開かれた場として、また五〇年、一〇〇年先の未来の求道者たちの魂の家として今整えることが、神の御心であり、またポール・ラッシュ博士の信念でもあると確信するに至りました。

当時わたしたちは、宣教の業を「よろこび」というキーワードをとおして見つめました。神の愛によってもたらされる「平和のよろこび」をあらゆる人々と分かち合えるように願いつつ、教会施設を地域の人々の交わりの場として開放し、様々な機会を通して、多くの人がこの聖堂で神に出会い、癒され、元気をとりもどせる場とすることが、この教会の大切な働きであると考え、建築に取り組んだのでした。

教会建物が刷新されてゆく過程は、長坂の信徒にとって神の豊かな恵みを体感する、喜びの時でもあったと思います。

新牧師館及び、会館建築関係

トマス 浅川 敏

牧師館

徐々に老朽し、時には雨漏りのするほどでした。建てつけも劣り、司祭様に住んで頂くには、心苦しい状態でした。

会館

礼拝が終わると、信徒達や、新しい求道者も会館へ集まり、女性信徒の有志が作ってくれた昼食（愛餐）を皆で食べ乍ら歓談、雑談したものでした。

卓球の出来る板の間と、もうひとつ座机を縦に二基並べた部屋。机の両側に座ると、奥に座った人達は用事が出ると、後ろ側を「ごめんなさい」の連発でやつとの事で部屋から出るといった状態でした。

平成四年度の教会委員会で審議した結果、管区、教区より資金援助を御願

現在の聖塔

いし、思い切つて牧師館と会館を建て替えることに決まり、アートデザイン GEN に発注し、平成五年四月から九月に差し掛かり、新築完成しました。





新牧師館



旧牧師館（現在、跡地は教会の畑になっている）



広いウッドデッキが特徴的な新会館

十一月に教区主教様をはじめ、来賓の方々に臨席を頂き、聖別式を済ませました。多くの教会、個人の方々から経済的なお力添え、励ましを頂き、出上がりました。感謝です。

総工費	四五、六九六、九五〇円
内牧師館	二一、七五一、九五〇円
会館	二三、九四五、〇〇〇円
総建築資金	五一、五〇五、五七六円
内献金	一三、五五九、五四四円
絵葉書、手芸品等販売	五、三一九、九七一円
預金取り崩し等	一、〇三二、八七一円
管区よりの借入金	一四、五〇〇、〇〇〇円
教区よりの借入金	一五、〇〇〇、〇〇〇円
個人よりの借入金	二、〇〇〇、〇〇〇円

最後になりましたが、姉妹教会である清里聖アンデレ教会からは、建築前及び、建築完成後も暫くの間、第一主日の信施を我々の教会にお捧げ頂きました事、誠に感謝に耐えません。改めて、この場で厚く御礼申し上げます。

長坂聖マリヤ教会コンサートについて

ヨセフ 佐野 紀人

いままでに長坂聖マリヤ教会で催されたコンサートは、基本的に新会館の完成（二〇〇八年）前と後に大別されると思います。

新会館の完成前は会場は礼拝堂を使用し、完成後は会館を使用しての、会館と司祭館の建築返済の為のチャリティーコンサートの趣が大きくなりました。また、催された回数も会館完成後のほうが圧倒的に多く、これは、建築返済金の一助になれば、との思いの現れだと考えられます。礼拝堂での音楽会は、ほとんどクラシックのみでしたが、会館での音楽会ではクラシックも声楽から様々な楽器演奏までと、ポピュラーではフォーク、フォルクローレ、カントリー、ブルースグラスなど、広範囲に広がっていききました。

礼拝堂を使用しての演奏では、通常の音楽会とは異なる、受苦日礼拝での弦楽四重奏演奏やギター演奏などが記憶に残っています。また、若手弦楽四重奏団の定期的なチャリティーコンサートなどもありました。



このように、長坂聖マリヤ教会では地域に開かれた様々なコンサートが繰り広げられました。なかでも記念碑的なコンサートとして記憶に蘇ってきますのは、一九九六年六月七日、「アルトウール・レ・ブランク弦楽四重奏団」の演奏会です。この四重奏団は甲府市出身の小林響さんが率いるカナダの弦楽四重奏団で、みなさん若手ですが、既に世界的に高い評価を得ていて、ちょうど日本ツアーの

合間に長坂での公演が実現したのです。五日前に双葉町の「ふれあい文化ホール」での公演を終えたばかりでした。このときの長坂聖マリヤ教会の牧師は古川潤児司祭で、企画から交渉まで総て一人でもとりおこない、確か、赤字になったら自腹を切る、背水の陣でのぞまれたはずで。当時、礼拝堂での催しで、一体何十名まで着席できるか前例がなく、出演料の関係もあり、九〇名分のチケットを用意しました。幸い、チケットは完売、遠くは静岡県からのお客様までお迎えし、満席でのコンサートの開始でした。

当日のプログラムは、

ドヴォルザーク 弦楽四重奏曲一二番へ長調 OP.96-179 「アメリカ」

シューベルト 弦楽四重奏曲一〇番変ホ長調 OP.125-1

の予定でしたが、当日の朝、急遽「アメリカ」からショスタコーヴィッチ弦楽四重奏曲七番 OP.108 に変更されました。古川司祭の挨拶のなかで、その旨伝えられますと、客席からはちよつと動揺に似たため息が洩れたようです。私は音楽に全くの素人で難しいことは皆目わかりませんし、ショスタコーヴィッチのこの曲は初めてでしたので、すごく緊張して曲の始まりを待ったのを覚えてます。

さあ、演奏が始まりました。聖所から発せられる緊迫した弦の響きが礼拝堂中に広がると同時に、客席の人々の魂が一瞬にして捉えられてしまったようです。初めて目の当たりにする「アルトウール・レ・ブランク弦楽四重奏団」による、ショスタコーヴィッチの弦楽四重奏曲は、圧倒的な迫力で私たちを魅了しました。そして、シューベルト。この有名な耳になじんだ曲を、この四重奏団は、山梨の片田舎の小さな礼拝堂での演奏にもかかわらず、決して手



を抜かずに緊密に組み立てて披露してくれました。これは、彼等の演奏家としての姿勢を垣間みた感じがして、いまでも心に残っています。

日本全国あるいは世界中のあらゆる場所で今日も様々な音楽会、コンサートが開かれていることでしょう。そして、一九九六年六月、新緑の長坂の小さな教会で開かれた一〇〇名弱のコンサートの、参加した人々の心に礼拝堂のたたずまいとともに記憶されたことでしょう。

バザーについて

グレイス 浜口 真理

私は二〇〇八年春に転居を機に、横浜山手聖公会より籍を移しました。山手では春と秋のバザーがあり、キリスト教系の学校へ通った私は、学校でもバザーがありました。自然と奉仕の精神を学び、バザーは日常行事のひとつとなっていました。バザーは、本来は苦難の中にある方々や恵まれない施設への寄付、その他教会の建築資金を集める為というのが大きな目的かもしれませんが、その他に教会同士の交流であったり、教会員だけでなく、いろいろな方との楽しい交わりを持つ場でもあります。

長坂聖マリヤ教会では、教会内に於いてバザーは残念ながら開催されることがないようです。場所柄、大勢の集客が望めないこともあり、牧師館、会館の建築が計画されたことにより、他教会のバザーに参加、もしくは販売をお願いさせていただいています。幸いにも一芸にひい

でた信徒のおかげで、絵葉書や手作りルームソックス、刺し子の布巾、手作りの人形を製作、販売してきました。また、製作に関してはボランティアの方の協力をいただいていることも伺っています。

ここ数年では、ゴールデンウィーク中に横浜山手聖公会で開かれる東神協働バザー、秋の清里聖アンデレ教会、甲府オーガスチン教会、そして日本キリスト教団甲府教会のバザーに出店しています。東神協働バザーは、

季節もよく、大勢の来場者が望めるので、長坂聖マリヤ教会のPRも兼ねて地元産の美味しいものを持って行くようにしています。自家野菜であるトマトのスープ、地元の美味しいソーセイジ屋さん協力してもらって、ホットドッグをたくさん仕込み、もちろん絵葉書や手芸品も持って行きます。

秋の三教会のバザーでは、手芸品とトマトの他に旬の野菜を中心に販売します。バザーでの働きはわずかかもしれませんが、長坂に於いてはその時に協力出来る人々が手伝い、助け合い、会場となる教会では、年に一度の交流を楽しみ、親交を深めよう。建築資金という大きな目的以外にも収穫の多いバザーとなっています。



教区婦人会の役員当番の思い出

エリサベツ 中村 登枝子（清里聖アンデレ教会）

五十周年と云う長い歴史の中で、ほんの数年前にマリヤ教会に足を運ぶ機会を与えられました。その当時の事を思い出として書こうと思います。

二〇〇四～二〇〇五年の二年間、教区婦人会の役員当番が山梨三教会に回ってきました。聖オーガスチン教会から池原司祭・内藤姉・牧野姉、聖マリヤ教会から松村司祭・相山姉・聖子姉、聖アンデレ教会から武藤司祭・桜井姉・立岩姉・中村、三司祭と七人のメンバーが一月の婦人会総会終了後主教さまから役員の内命式を得て、チャプレンの武藤司祭の指導のもと、毎月一回甲府と清里の中間に位置する長坂の教会を会場に集合し、役員会を持っていました。その当時は、今の奇麗な会館ではなく、サッシ戸の会館に外で靴を脱いで、中に入っていました。不思議なほど誰も欠席することなく、通つた思



甲府聖オーガスチン教会での婦人会役員引継ぎ

い出があります。まだ寒い時期から夏・秋・冬と年間を通じて長坂の教会を訪れたのは、他教会の信徒としては貴重な時間だったなと思います。清里から比べたら暖かい長坂、春は一足早く春を感じるお花がいっぱい咲き、夏は戸を全開にして手持ち弁当を食べ・祈り・話し合いをしました。秋は教会の庭で実つた柿が窓際にズラリと吊るされた干し柿を眺め、清里が大雪でも長坂には雪がなく、穏やかなファミリー的な教会がとても羨ましいと思いました。

五十年と云う歴史のあいだに聖マリヤ教会信徒の一〇一歳で召された奥水江つ姉は一九八二年に横浜教区婦人会会長を山梨県として初めてお勤めになったと伺いました。三〇年前の長坂はどんな教会だったでしょう。それから何度か歴代の役員さんを経て、ほんの短い私の歴史：そんな中でも相山幸恵姉・松村聖子姉が召され、池原司祭・武藤司祭・松村司祭もそれぞれの地にとバラバラになつてしまいましたが、聖マリヤ教会の雰囲気は以前と変わらず、穏やかな素敵な教会です。これからも祈りの場として、ますます発展されることを心から願っています。

（編註）横浜教区には神奈川、千葉、静岡、山梨の四県に三二教会、伝道所があるが、山梨には三教会あるのみである。山梨三教会では教区婦人会の役員当番を担う力がないと見られて、かつては担当することがなかった。ある年、静岡県が当番で、山梨県の下部で大会が開催された。そのお手伝いをしたのがきっかけで、奥水江つ姉のリーダーシップのもと、「やってやれないことはない、やってみようじゃないか」と一致団結して、一九八二～八三年に初めて山梨三教会で婦人会役員を担当することとなった。教区婦人会総会（於 甲府）、婦人会大会（於 忍野）を美事に大成功させた。時の教区主教からは「山梨でも充分できるじゃないか、見直したよ」との声。それ以後、山梨県の教会に対する見方は全く変わり、偏見もなくなり、見直されたのである。今では「山梨の教会では…」と云う牧師、信徒は誰もいなくなった。そして、一〇年後、山梨に当番が回ってきたとき、県下で最も小さい長坂聖マリヤ教会から再び会長が選ばれ、浅川安子姉が就任した。中村姉には、その次に当番が回ってきたときの思い出を書いて頂いた。

祈りの教会 ― 長坂聖マリヤ教会の五〇年

イサク 有泉 均（甲府聖オーガスチン教会）

主にあつて兄弟教会として誕生した長坂聖マリヤ教会創立五〇周年を迎えるにあたり神様への感謝とお慶びを申し上げます。

長坂の教会は石と木と畳で作られた農村伝道に育まれた祈りの教会です。私には農民の信仰生活を描いたミレーの作品と重なってきます。周囲は山が多くそれ故に気温が低く、人々の熱い信仰心と勤勉で教育熱心が導かれてきました。大きな山塊が丘の上に立つ教会の鐘にこだまするように迫つて見えます。近年これらの環境を求めて各地から一線を退いた個性的な魅力をもつ住民の転入が増加しているといわれます。県都の甲府が目標を失いかけたかのように若者の転出が盛んなのと対照的でやがて山梨の文化の中心になるのではと思われる勢いを感じます。



2010年山梨県下三教会合同礼拝（甲府聖オーガスチン教会にて）

名取多嘉雄さんによると、山国である山梨県は江戸時代に幕府直轄領となつたために郷土の文化的求心力が盛り上がり、明治維新の際にも欧米文化から取り残されていき、この時期に山梨の聖公会の伝道もスタートが周辺各県に比べ非常に遅かつたといわれています。都市型の甲府聖公会（現在甲府聖オーガスチン教会）が沼津からの伝道でスタートしたのは昭和九年でした。清里は昭和二年にBSA（日本聖徒アンデレ同胞会）の活動が始まり、昭和一三年に清泉寮ができましたが、聖ア

ンデレ教会が生まれたのは昭和二三年です。長坂聖マリヤ教会が昭和三七年です。

昨年の教区会ではこれからの教区の宣教を考える組織を立ち上げましたがそこでは発表から三五年ほど経つた『希望のメッセージ』が再び取り上げられました。ラムゼイ大主教の「自らに生きる教会はおのずから死に至る」という宣教する教会の役割が語られていました。この三五年間の教区新体制である協働主事会、援助・補助教会の仕組みができましたが、近隣教会との共同運営は協議続行でした。山梨県全体では聖公会の木俣茂世司祭、カトリック、教団関係者によるエキューメニカルな山梨県教会一致懇談会の設立がありました。すでに四〇年ほど続いています。クリスマスの集い、大寒の季節の一致祈拝会（今年は今しばらくりに長坂の教会でも行われました）、復活日の早天礼拝（聖公会を含めて県内のほとんどの教会が甲府千代田霊苑にもつ教会墓地で聖書の復活に基づいた早朝に行う復活礼拝）は定着しています。

私たち甲府の教会でもみ許に召されてここで眠る信徒のために教会墓地を建設いたしました。眼下にオリーブ山を思わせる盆地の美景を眺めることができる素晴らしい教会墓地です。教会の宣教は少なくとも二〇年先を見て計画・実行をする必要があります。高齢化社会を向かえて教会墓地は永遠の命を与るでしょう。できれば聖公会としてまとまった教会墓地がほしいものです。



2012年5月まで使われた看板

これからの教会

ヨセフ 佐野 紀人

教会は、いつの時代にも、その時代の流れとともにあります。

私が洗礼を受け、教会生活を始めた一九七〇年代、町や教会は子供達であふれていました。日曜学校では、各学年ごとにクラスがあり、中学生や高校生達は、日曜学校の指導的な役割を担っていました。様々な楽しい行事のなかで、一年がアツという間に過ぎていきました。

やがて、彼ら彼女らが進学し、就職して、それぞれの土地で家庭を持つ頃、教会には静けさが戻ってきました。子供達の声が響かない礼拝堂。町内や野原で見かけなくなった子供達。大人と老人だけになった教会。昔に比べ、子供達の数が減少してしまったのなら、それも時代の流れでしょう。

この頃、感じるのは、毎主日お顔を拝見し、親しく話し合う方々のなかで、入院されたとか自宅療養中などと聞き、その方のいつも座ってらっしゃる席がポツンと空いているのを見ると、心配であり何とも寂しく感じます。何かフォローできないか、と、思います。フォローするとすれば、一体どんなかたちが相応しいのだろうか？たとえば、日常生活が、一人で（あるいは、二人で）身体的に送りにくくなった方々のグループホーム（この場合、支援スタッフが必要でしょう）が教会の敷地内にあつたらどうだろうか？それまでに送った別々の人生があり、それぞれの好みや個性が違った中で、それらを尊重しつつ、日常生活がスムーズに送れる施設というものは、果たして可能だろうか？礼拝堂まで来られない方には、部屋での聖餐式が行われ、愛餐会には皆と合流して食事をしたり、と、そんな風な自由な家。

還暦を過ぎたあたりから、こんなことどもを、ふと、考えるようになりました。

教会の音楽の中で育ち、現在の私がある

アグネス 堀久美子

音楽を極めてその道に進むには、多くの努力が必要でお金もかかる。まあお金はともかく、努力をもつてしても埋められない才能の足りなさ、「できない」という劣等感に堪えられそうもないと、早々に諦めていた。

しかし、教会で聖歌の伴奏を任せられると、そうは言っていられなくなる。間違えたからといって、何度もやり直しをして礼拝の流れを止めるなど、できない話して。（神様とお話ししに来ているのに、誰かの失敗が気になってそれどころではなくなってしまう、なんて！）

当時の自分にできる最高の努力をし、なんとか形になったかなと思っていた。少し鼻が高くなったまま東京の教会に行ってみると、何人ものプロの伴奏に、またしても早々に白旗を揚げ、素直に歌う方にまわっていた。すると今度は歌う楽しさに目覚め、礼拝を進めるお手伝いに参加するのも、また楽しかった。

自分が楽しい、気持ちがいい、と思う礼拝には、必ず良い伴奏がある。伴奏だけでなく、礼拝に参加する皆の気持ちが一つになって、神様とお話できるのだと思う。

そうありたいと思いつけていたことが、今の仕事にも繋がっている。

皆の気持ちを一つにすることができ音楽、元気になったり、癒されたりと、やはり音楽にはすごい力があると思う。これからも「音楽」を楽しんでいきたい。

回想

ヨハンナ 浅川 安子

戦中戦後の時代を体験した私の八一年の人生を回想する時、総てが神様の愛の呼び掛けであったことに今気づかされる。一歳で父を、一七歳で母を失い、まだ特效薬の無かった二〇歳の時に肺結核になった。生きることに疑問を持った。ある日「命の誕生」という記事に出合った。読み進んでいる時にふいに「汝らは神の選民にして聖なる愛さるる者なれば慈悲の心、仁慈、謙遜、柔和、寛容を著よ」という言葉がはつきりと頭に浮かび、読んでいた記事と重なった時すごく感動した。生かされている命、病気の役立たずの自分の命が涙が出る程愛おしく思えた。もう病状に一喜一憂する事はやめ、今できることを精一杯しようと決心して点訳奉仕を始めた。点訳書は非常に喜ばれ感謝された。この体験が私の人生と価値観の方向付けとなった。

やがて進歩した医学に助けられ、命拾いし、人並みに結婚し子どもにも恵まれた。娘は六歳になると教会学校に通い始め、数年後娘に強請されて私は教会に連れて行かれた。するとその日の礼拝で朗読されたのが、コロサイ三章一二節。私は一〇数年ぶりで先の言葉が聖句だったことを初めて知った。私の教会生活の始まりである。

一九七二年、四一歳の時に洗礼、堅信にあずかった。畏れと喜びと感謝の気持ちが入り交錯した緊張状態の中で、唯額に記された十字架の感触だけが心に強く残っていた。

時代が福祉に目を向けるようになると、私の活動はしばしば新聞等で紹介され、数々の表彰を受けた。何時しか他人の目や言葉に惑わされ私の心に芽生えたおごり心に愕然となったり自己嫌悪に陥った。教会生活は常に自分の生き様を見直すきっかけとなっている。

神様のお導きと助けによってクリスチャンに加えていただいた恵みを感謝し、堅信式での誓いと約束を守る努力をしていきたいと思う。主のお導きを信じて祈り求めつつ。

讃美歌クリスチャン

トマス 浅川 敏

「十字架の血に清めぬれば『来よ』とのみ声をわれは聞けり…」と病棟の外からの女声で歌うのに目が覚めた私は、この旋律に魅せられてしまった。単純だが美しい。聞けば讃美歌だった。未だ二十二〜三歳だった私は早速讃美歌集を手に入れて開いてみると、易しい美しい歌が沢山載っているではないか。結核での入院中を楽しく過ごすとともに、退院後、このような歌を皆で礼拝の中で歌う教会へ行ってみたくなくなった。而しその当時は、近くにはありませんでした。

外国の小説を少し読むうちに、教会が一般民衆の中にしつかり位置付けている社会が羨ましくなりました。

二十六歳の時、故郷（白州町）から親戚の人が経営する東京の会社に就職。同僚となったM君に福音ルーテル池袋教会に案内され、暫く通ううちに洗礼を受け、曲りなりにも神様に近づくことができたと思ひ、当時の「讃美歌クリスチャン」という表現が人の口の端に乗ったが、恥ずかしながらまさにその通りでした。

司祭様の説教の大切さが分かるようになったのはその後のことでした。

君江さんと私

プリスカ 神林 俊子

二〇一一年、私にとって大事な信仰の友人が二人、天に召されました。一人は長坂聖マリヤ教会の相山幸恵姉。何かあるといつも気遣って電話をくれる人でした。もう一人は三十数年前、私が清里聖アンデレ教会で武藤六治主教(当時、司祭)より洗礼準備を受けているときに出会った小林(旧姓「渡辺」)君江姉でした。

初めて会ったのは彼女が高校生頃。小海線の長野県の八千穂から友達の坂本のぶ江さんとほんのわずかな献金を持って毎週礼拝に来ていました。ある時こんなことがありました。「武藤先生、帰りの電車賃と来る時少し足りないだったので(返すための)お金を少し貸して欲しい」と。日曜学校も熱心に手伝い、年は私とずいぶん離れていましたが、何となく気が合って、悩み事を聞いたりするようになりました。

教会の鐘と清里が好きだった彼女、縁あって清里に住むようになり、二人とも忙しく、ゆつくりと話をする時間も持たなくなっていました。いつの間にかお互いに姿を見るだけ目を合わせるだけで何も話をしなくても気持ちに通じるようになっていました。今でも日曜日には清里聖アンデレ教会にいるような気がして仕方ないのです。

「私はイエス様のもとで楽しく過ごしているよ」と言っているかもしれない。友人の悩み聞くこと多けれど、なにもできずに、ただ神に祈る。

この願い聞きたまえと

(二〇〇三年五月)



2012年5月にできた新看板

再び教会生活に戻ることができて

マгдаラのマリヤ 清水 正子

私が自分の意志で初めて教会の門をくぐったのは長坂聖マリヤ教会で、高校一年の夏でした。しかし、学校はメソジスト系で、聖書と讃美歌を用い、礼拝のスタイルも異なり、戸惑いを感じつつ、遠のいてしまいました。

その後、大学生となり教育学を専攻した私は、母が生涯愛読していた婦人之友や明日の友の影響もあって、羽仁もと子の子の教育に興味を持ち、ある宿題が為に自由学園に何度も足を運び指導を仰ぎました。記憶に残っているのは、幼少期から神様の愛を受けた教えが日々あるのとないは、成長し、大人になるまでの人生や充実した教会生活を過ごすのに大きな影響があるということでした。

卒業後は、出版、編集の仕事に就きましたが、数年後、大学の担任だった教授から聖公会の小学校教諭のお話を頂き、何とか採用され、校長先生をは

じめ、多くの先生方と沢司祭のあたたかいお導きで信仰生活の第一歩が始まりました。受洗して三十数年となりますが、様々な人生経験を致し、三〇四十代は苦しみの連続で教会生活も離れる事となりました。

そして、私の今日迄の人生で最も苦しく、辛いそんな時に常にあたたかい励ましを日々続けてくださったのが、親でもなく、ある主教夫人でした。教会にも行かず落ち込んでいる暇もなく生活の為に働き続ける私の為に、毎日お祈りをしてくださり、『何もできなくてごめんさいね』とおっしゃるそのお言葉に絶句でした。時は過ぎ、落ち着いた頃、ご夫人や今まで助けてくださった方々にどのようなお返しをとお考えようになった時、信者でない夫の勧めもあり、教会生活に戻り、神様のお仕事をする事が最高の恩返しと考えました。昨年の一イースターに後藤さんの後について再び門をくぐり、眞野先生のご指導のお陰で十二月に移籍して今日に至ります。私にできる事を精一杯尽くして参ります。神様と皆様と共におられますことに、心より感謝申し上げます。

今はただ神様に感謝

マリヤ 佐野 恭子

生まれ故郷の北海道から山梨へ来て四〇年弱、その間に洗礼・堅信を受け、信徒として長い年月を経ながら、自分にとって神様とは、教会とは、信仰とは、ということを実剣に考えるようになったのはこの四、五年のように思います。

クリスチャンとは名ばかりで、多くの罪を重ねてきました。教会を離れそうになった時もあります。自分を見失い、自分を孤独の海へ引き寄せていたその頃は、今思えば苦しい時期でした。

そんな私を支えて下さったのは、今は亡き相山幸恵姉でした。彼女は神様の愛と信仰に生きた人でした。教会へ行こうとしない私にいつも週報を届け、私のために祈り、涙さえ流した姉、自分自身はけっして飾ることなく、悩み苦しむ人のために祈り、求める人には与え、清貧を貫いた姉。そんな幸恵姉によつて私は神様の愛に気づき、教会へも行くようになりました。

そして、私が私を取り戻した時、突然彼女は神様のもとに召されたのです。二人で聖書を読みながら年をとっていかうと話していたのに。どうして、どうしてと辛い毎日でした。彼女と過ごした日々、語り合った事を思い出しながら、礼拝堂でいつも幸恵さんが座っていた場所を見つめました。

彼女が召されて約一年。今年の四月から、私は礼拝堂の清掃奉仕をさせていただいています。朝の爽やかな空気の中、眞野執事が流して下さる教会音楽が響き渡り、無心に箒木を動かしていると、心が澄んで行きます。そんな時、ふと気配を感じる時があります。神様でしょうか、幸恵さんでしょうか。

「大丈夫。私がついている。私が見ている。」

そう、こんな私でも神様は受け入れ愛して下さる。祈りによつて私に教えてくれた幸恵姉。今はただ神様に感謝です。



相山幸恵姉（左）と佐野恭子姉（右）

思えば、どれだけ多くの人々がこの礼拝堂で跪き祈りを捧げたことでしょう。召された方々の顔が浮かんできます。見えていますか？皆さんの愛した教会は、五〇才の誕生日を迎えましたよ。おめでとう、おめでとう
長坂聖マリヤ教会。

神へと帰る私の道

フィリップ・グラッドストーン・マカティ・ジュニア

洗礼を受けてからの私の人生を短く記します。クリスチャンホームで育てられ、私は教会に毎週通い、一九四七年五月に一二歳で洗礼を受けました。もちろん、私はまだ若く、いかに神様のご意志に自らをゆだねるか、どうしたらそのように生きることができるか、十分に理解できていませんでした。

一七歳の時、私は意欲をなくしてしまい、自分の中の空虚さを埋める何かを探しているような状態になりました。朝鮮戦争が起きたとき、私は高校をやめ、空軍に志願し、一九七五年二月まで従軍しました。軍にいたとき、そして退役してからも、私は教会に行かず、神とイエス・キリストを私の人生から事実上閉め出していました。

自分自身のことと問題にぶつかった時、生死に関わる状況になった時、初めて、神に助けを求めました。人生の道程において誤った道を進んだとはいえ、私は決して神とイエス・キリストへの信仰を失っていたわけではありませんでした。長い年月の後に、私は妻と共に清里聖アンデレ教会の礼拝に出るようになりました。妻はそこで洗礼を受け、後に長坂聖マリヤ教会に籍を移しました。妻は私に礼拝に出て、教会員になるよう励ましました。しかし私は洗礼の記録を見つけれず、受洗した教会でも記録が見つかりませんでした。清家司祭にどうすればよいか尋ねたところ、事情をよく理解して下さい、二〇一二年一月八日に洗礼を受けられるようにして下さいました。

神は私に対して忍耐強く、たくさんの仕方で祝福してくださいました。私はすばらしい妻に恵まれ、教会でよい交わりと指導を与えられています。これまでの人生をどれだけ無駄にしたか进行、クリスチャンとして生きたいと思わされています。今、私は、長年経験しなかつた満足を覚えていきます。

My road back to God

Philip G. McCarty Jr.

Following is a brief summary of my life since being baptized. Reared in a Christian home, I attended church regularly and was baptized in May 1947 at the age of twelve. Of course, I was too young to fully understand how I was to commit myself to God's will or learn how to do so. When I was seventeen, I became discouraged and seemed to be searching for something to fill a void within me. During the Korean War, I quit High School and enlisted in the Air Force and served continuously until February 1975, While in the military, and after retiring I stopped attending church and virtually blocked God and Jesus Christ from my life. Only when I experienced personal problems or a life threatening situation did I call on God for help. Even though I took a wrong turn on the road of life, I never lost my belief in God and Jesus Christ. After many years I attended church with my wife at St. Andrew's. She was baptized there and later moved her membership to St. Mary's. She encouraged me to attend and become a member, but I could not locate my baptism record nor could the church where I was baptized. We asked Reverend Seike what I should do. He was most understanding and made it possible for me to be baptized on 8 January 2012. God has been patient with me and blessed me in many ways. I'm blessed with a wonderful wife and we attend a church with a good fellowship and leadership. I want to live a Christian life because I realize how much time I wasted due to the life I lived before. I'm now more at peace with myself than I've been in a long time.

神様に任せます

テレサ マカティ 菊枝

長坂聖マリヤ教会創立五〇周年記念おめでとうございます。皆様と御一緒にお祝いに参加できました事、心より感謝申し上げます。

私の人生は幼少の頃より、我慢我慢、忍耐忍耐の人生です。日本の小学校に通いましたので、通学途中での罵詈雑言！教室の中でも…言い返す事も出来ない！内気な少女でした。勉強意欲もなく、現実逃避の空想ばかりしていました。誰に対しても一度も甘えた事も辛いと言って泣いた事ありません。私の心はアイスでした。今でも痛みは心にいつもある。

羅針盤もなく、荒海に一人で放り出された様な人生でした。シングルに戻った三十代の頃、自分の事しか考えられない自分病の人ですので、周りの人達へは過大なる迷惑をおかけしてしまいました。修羅場の経験、トラブルの連続、悪い事は身から出た錆です。自分の責任。今は罪を悔い改めて、懺悔していただきます。

一九九九年、フィリップと再婚。二〇〇〇年一月、義母が体調を崩していましたので米国へ行きました。一度日本へ戻って、二回目は五月、アルツハイマーが進んでいて息子のことは分かりませんでした。六月二〇日、享年八七才で天国に召されました。七月まで米国に滞在していましたので、葬儀に参列できました。教会にも数カ所行くことが出来ました。素晴らしい牧師との出会いもあり、この時が教会と交差した原点です。

二〇〇六年に清里聖アンデレ教会で聖洗式、堅信式を受けさせていただきました。当時ストレスで体調不良、心にも不調が表れ、四面楚歌の中に居たので、本当のことを申せばクリスチャン生活とは？よく分かっていませんでした。弱い私のような人間も神様は罪を赦して自分の足で立てるようにして

くださいました。誰の事も憎まない、どの集団の事も、どの人の事も、人の不幸を願ってはいけない、神様に任せます。

残りの人生は、神様を一番として奉仕し、モーゼの十戒を守り、教会生活を歩んで行きます。

アツシジのフランチェスコの事

アツシジのフランシス 植松 昌

私は、二〇〇五年七月三日に清里聖アンデレ教会で、武藤司祭様、遠藤主教様により、洗礼、堅信を授けて頂きました。仕事を終えて一年、六十一歳の時です。教名を「アツシジのフランシス」としました。私は以前からイタリアの歴史、文化等に興味が有り、何度かアツシジも訪れており、そこで知ったフランチェスコ（フランシスのイタリア語名）の人生、信仰に大いに心動かされるものがありました。或る日を境に、彼は前半生の家族、友人に迷惑の掛け通しの生活から一転、ここが凡人の理解の及ばない所ですが、禁欲と献身の精神に従って、信仰者としての人生を送ることになりました。勿論私の前半生がフランチェスコの様に放蕩三昧であった訳ではありませんが、およそ禁欲と献身とは無縁な生活に明け暮れておりましたので、仕事を離れ、世の柵から開放された今、フランチェスコの回心を縁に後半生を送りたいと思うようになりました。

ではそのアツシジのフランチェスコとは、どんな人物だったのでしょうか。彼は、西欧の宗教千年の長きに亘り、聖職者に押し付けられてきた既成概念を取り払い、虚心に聖書に接すれば、イエス・キリストの教えは思いやりと優しさに満ちていると説き続けたイタリアの聖職者、と言うのがこの人物像

です。その説教を聖職者しか解さないラテン語でなく、皆が話す平易なイタリア語で行なった為、人々は漸くイエスの言葉がストーンと胃の腑に落ちたのだと思われます。又これを聖職者と人々を分け隔てる事無く、同じ目線で行いましたから、フランチェスコ会が忽ち急拡大したのは、当然の帰結と思われます。

何故フランチェスコが、その約束された将来を捨て、召命に応じたのかは、幾つかの伝聞を紐解いても良く判りませぬ。しかし一つ確かな事は、彼が全ての命あるものに対し（鳥の説教は夙に有名）、等しく、惜しみなく慈愛の目を持ち続けた事だろうと思われます。

これこそが正に、全ての教会、信仰者の目指すべきものであり、私もこの事を心に刻み、これからの信仰生活に勤しみたいと思っっているところです。

罪多き私が神の愛に触れる

ヨセフ 森岡 一夫

私の祖先は源氏で、親族菩提寺内の系図墓碑は源の姓から始まっています。祖母から聞いた話で、平清盛に敗れた源は現在の岩手盛岡まで逃げ落ち延び、その地で盛岡姓を名乗り、源平合戦のため兵力を増強しながら関西へ移動中に、総大将の正体を隠す為、更に森岡に変えたとの事です。私はこの武士的な親族争いの多い家系に育ち、今も親族間の交流は薄く、信仰には無関心でありました。

私は幼少時より音楽に興味を持ち、大学卒業後は父の経営していた製菓業を継がず、電子楽器設計製造演奏の仕事に従事しましたが、当時の音楽業界は激烈なサバイバル社会で、企業間の営業妨害、乗っ取りあい、特許無視等

の醜い状態で絶え間なくその波にもまれながら必死に生き抜いてきました。芸術の美が香るはずの音楽業界が、この様な社会であった事は誰も信じられないでしょう。

私は、ただ多くの人に喜ばれる良い楽器を設計し、それで世界の人々に楽しい音楽を演奏して届けるのが使命だという信念を持ち続けた一方、色々と悪辣な妨害をしてくる周りの企業には、神様そっちのけで徹底的に激戦を交えながら超賢沢な貴族的生活を維持してきた罪多き人間でした。

しかし、七十歳を過ぎたある日突然妻が自動車事故で重傷を負いました。その直後、次女が東京の教会で洗礼を受け、私にも入信を薦めました。その結果近所の三教会を見学に訪れました。古い建物ですが、素朴で安らぎを感じたのが長坂聖マリヤ教会でした。五回程礼拝に参加した時、私は末期癌を宣告され入院しました。次女は入院闘病中入院中キリストに関する書籍を色々届け、イエスの愛を信じるように私に勧めました。そしてそれを読んでいるうちに素直な気持ちでキリストを信じる様になりました。同時に夫婦共に老いも迫ってきました。この様な状況下で担当医から、一時的には非常に苦しい副作用を伴うが最新化学療法で末期癌を完治できるが、治療は患者本人の決心が必要で自分で良く考えて返事をするようにと言われました。その夜は眠れない一晩でしたが、神と担当医師を信じ、この治療を受ける決心をしました。担当医は早い結論を出した私に、笑顔で頑張りましょうと云われました。苦しい癌治療との戦いでしたが、昨年十月に癌は完治しました。

妻の祖母は明治時代に英国から来日した女性宣教師でした。導きの糸で繋がれていたのでしょうか。偶然にも長坂聖マリヤ教会五十周年の直前に洗礼を受けました。教会では私の親族以上の親密なお付き合いも生まれ、夫婦共にキリストに愛されて余生が送れる事を心から感謝し、信じる事が私の癌の完治にいたらせたと確信しています。

わずか二年間でしたが

執事 パウロ 友寄 景方
ともよせ かげまさ

長坂聖マリヤ教会といえは何と云っても朝六時、夕六時の礼拝を思い起します。清里聖アンデレ教会と並び、朝六時の礼拝は日本聖公会では最も早い時間です。鐘の音が、「ここに教会があります」という「宣言」をしています。京都の町中のお寺さんでさえ、釣鐘を鳴らしにくくなっているご時勢の中で、この鐘の音を長坂聖マリヤ教会のものとして聞いてくださっている隣近所の方々がいらつしやること。先達のご努力による、素晴らしい賜物です。

教区で一番広い敷地の草刈りも忘れ難いものです。あれだけの作業ができるのは、長坂聖マリヤ教会の「特権」かもしれません。なかなか、やりがいがありました。刈つても刈つても生えてくる草の、おそるべき生命力！

皆さんが礼拝に忠実であることが最も特筆すべきことでしょう。主日礼拝を、お一人おひとりが厳守され、心を込めて祈られる姿に、改めて、教会の根本、基底は、祈りにこそあるという、当たり前前的事实を、知らしめています。

この真摯な姿勢とあわせて、毎主日の愛餐会は、素晴らしいものでした。祈りと交わりという、キリスト教会が初期から大事にしてきた大切な宝が、生きていくのです。ことに、愛餐会の準備に長くご奉仕して下さっている方々のご努力には、ほんとうに頭が下がります。

間近にそびえ立つ甲斐駒が岳、遠くに見える富士山、境内地のハナミズキの木々、厳肅な礼拝の時間、なごやかな雰囲気のある愛餐会。さまざまシーンが、脳裏をよぎります。

わずか二年間の在任期間でしたが、離れて愛することができるといふことを、長坂聖マリヤ教会について、いま、思うのです。

土を耕す者として

執事 パウロ 眞野 玄範
まの みちの ちのり

神学校を出て最初の任地であるこの長坂聖マリヤ教会で初めて教籍簿というものを手にした時の強い印象は、今も時々思い起こされます。そこに記されている情報はわずかですが、それが語る事実はなんと重たいことでしょう。これだけの人が教会と出会ってきたという事実、そして、その半数以上の人が教会から離れているという事実。さらには少なからぬ方が仏式で葬儀をされているという事実。一人ひとりの人生において教会が持った意味を考えざるをえませんでした。イエスさまと出会えたのだろうか、福音を福音として聴き、聖餐に聖餐として陪り、新しい命に生かされる経験をされたのだろうか、葬儀の形がどうであれ永遠の命への希望をもってこの世での生涯を終えられたのだろうか、と。

その後、家庭集会や訪問等で、また葬送式の折やこの記念誌作成の作業の中で、教会生活を長年続けてこられた方々、また様々な事情で教会に来ることはできないでいてもイエスさまとの出会いを胸にして生きてこられた方々にお話しを聞かせていただき、多くの方の人生においてマリヤ教会が、確かに、神さまに悩み、苦しみを聞いて頂く場、慰め、癒し、解放を与えられる場であったこと、讚美を共にする、喜び溢れる交わりの場であったことを知ることができました。それを証しする言葉は多くの場合、ごく短い一言、しかし、人生を凝縮する一言でした。例えば、二〇一一年五月一六日に逝去された相山幸恵姉が遺された「恵みは十分でした」という言葉……

まだわずか一年半の現場経験ですが、この中で与えられた確信、すなわち宣教は基本を大切にすることに尽きるという確信は深まるばかりです。長坂に来て初めて畑を始めましたが、畑仕事と牧会とはよく似ているとも思わされています。土を耕す者として愚直に歩んでまいりたいと思います。

長坂聖マリヤ教会創立五〇周年記念礼拝 説教

日本聖公会首座主教・北海道教区主教 ナタナエル 植松 誠

本日、長坂聖マリヤ教会創立五〇周年記念礼拝にお招きをいただき、誠にありがとうございます。私は小学校五年生から高校卒業まで、この教会で過ごしました。私の故郷であるこの教会に、今、創立五〇周年の機会に里帰りをし、説教者として立たされていることに深い感慨を覚えます。最近、自分が歳をとってきたということをよく実感します。そして、私の人生のいろいろな場面で出会った方々のことを思い出すことがよくあります。中にはあまり意識してなかった人、あまり思い出したくない出会いや関わりなどもあります。今、自分の来し方を振り返りますと、何だかんだと言いつつも、今の私の存在は、これらの方々との出会いの中で形作られ、少なからぬ影響を受け、祈られてきたその集大成であると思わされます。



この礼拝堂の裏が私の生活の場でした。ベッドが四つ置かれ、野瀬秀敏主教様から頼まれた二、三人の少年と共に、毎朝六時の聖餐式から始まる日々を過ごしました。数年経って、これらの少年たちがいなくなつたあとは、そこにいろいろな人が入ってきて、いつも家族以外の人が一緒に住んでいました。牧師である私の父はそれらの人の

素性や背景を一切私たちに言いませんでしたが、一緒に住むうちにそれらの人々のことがわかってきました。仕事のない人、家出してきた人、社会で問題を起こした人などでした。中には我が家に大いに迷惑をかける人もいて、私は腹を立てて父に詰め寄ったことがあります。「こんな人、追い出してしまえ」と言う私に、父は、「追い出すことは簡単だが、イエス様がこの人を愛して、十字架にかかってくださったことを思うと、とても追いつくことはできない」と答えたのを今もよく覚えています。多感な青年期、私にはそれが理解できず、綺麗事を言っているようにしか思えませんでした。教会から、キリスト教から遠ざかりたいと思って、長坂を離れて遠く大阪の大学に行った私でした。その私が、今主教となつて、この礼拝堂にいることに私は胸が熱くなります。嬉しかったこと、辛かったこと、悲しかったこと、そして、自分の中で消してしまいたい過去のある部分など、それらのどれ一つ、無駄になることなく主は用いてくださり、恵みに変え、今の私にまで導いてくださったことを思い、感謝に堪えません。

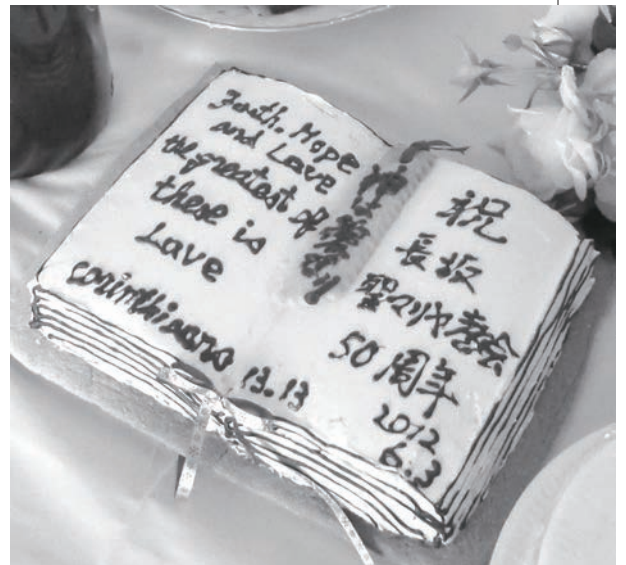
私は司祭に叙任されて以来、「巡礼」を自分の信仰生活の大事な一部だと考え、時間を作っては巡礼の旅をしてきました。イスラエルのような聖地に限らず、アッシジやサンチャゴ・デ・コンポステラ、またイギリス各地の修道院や大聖堂、教会も訪ねました。その度にいつも感動させられるのは、時間を超越した人々の篤い信仰です。大きな教会や大聖堂を訪れ、それらが数百年かけて建てられたということを感じますと、何か信じられない「信仰の壮絶さ」を感じるのです。自分の生きている間には完成した姿は見られないことを百も承知で、それでも数百年先に完成する大聖堂を今から喜びつつ、祈りながら一つひとつ、石を積み上げていく人々の無理の無い信仰の歩みにただただ圧倒されてしまい、それらの建物の壁や土台の石をそらつと撫で、額を押し当て、それらの人々の信仰を想うのです。

今、私は、長坂聖マリヤ教会の創立五〇周年のこの時、五〇年の歴史を

持つこの教会に巡礼に訪れているような気がいたします。五〇年の歴史を持つた教会を巡礼しながら、私は、この教会で信仰生活を送った数多くの人々に思いを馳せます。その内の多くの聖職・信徒はすでにこの世の生涯を終えて天の御国で安らいでおられます。また、この教会を通じて、日本全国、また世界各地に散っていった、福音を宣教した方も多くおられることでしょう。今日、私たちの巡礼は、五〇年の時間と空間を超えて、「私たちの長坂聖マリヤ教会」という信仰共同体⇨家族の中を通り過ぎていった方々を思い起こすところから始めたいと思います。

これらの聖職・信徒の方々は、それぞれがその時代にあって、主に召されて救いの恵みに与った方々です。彼らは自分が主キリストによって遣わされた教会、職場、家庭で信仰を生き、それを自分のものだけに留め置かず、他の人々に伝えていきました。それは決して順風満帆な信仰生活ばかりでなく、様々な困難や試練の中で、悩み、落ち込んだりした先輩たちの姿もあったと思います。しかし、そのような時でも、その解決を彼らがどのようにキリストへの信仰の中で見出していったかを知る時に、私たちはこれら先輩たちの生き方から多くの励ましと希望を与えられます。

北海道の札幌市内のある教会では、八月の第一日曜日に逝去者記念礼拝をすることになっています。その礼拝の中で、すでにこの世の生涯を終えて天に召されたその教会関係の逝去者の名前を牧師が読み上げます。二〇〇名にも上るこれらの逝去者の名前と逝去年月日を読むのに一五分はかかります。それで、その前の教会委員会で、ある信徒が牧師に、「先生、逝去者の名前を読むのに時間がかかるので、先生の説教は短くしてください」と言ったそうです。「何と失礼な！」と牧師は当初憤慨しましたが、その週、よくよく考えてみると、逝去者の名前を読みあげることとは、実は、それだけで大変な説教であることに気付かされました。その教会の二〇〇名にも上る逝去者たち、その一人ひとりを主イエス様が、良き羊飼



祝会のケーキ（楠本敬子姉作）

の人々を主イエス様が一人ひとり名前を呼んで呼び出し、召してくださったということ。それは単に名前を列挙するという以上の意味があるのです。逝去者一覧表にある名前を一人ひとりゆっくり「読んで」いくのは、主がその一人ひとりの名前を「呼んで」くださって、愛し、導き、養ってくださったことを想起することなのです。しかも、その一人ひとりの信仰生活は、その人だけに留まらずに、家族や友人などにもいろいろな影響を与えていったことを考えますと、一人の逝去者の名前から限りなく広がっていく主の恵みの証しを結集したものが、その教会の宣教であり、現在の教会の姿なのではないかと思うのです。

長坂聖マリヤ教会の五〇年の歩みの中で、私の知らない時、知らないところで、このような信仰の営みがあったこと、数多くの聖職・信徒がこのように主によって名前を呼ばれ、召されたこと、そしてその彼らが教会を思い、祈り、議論し、学び、自分に与えられている賜物を献げてきたことは、昔、石を一つひとつ積み上げて大聖堂を築いた名も知れぬ信仰の先輩たち

いとして、名前を呼んで招き入れ、緑の牧場に憩わせ、水辺に導き、迷い出た時には、やはり名前を呼んで探しに来てくださったという事実がそこにあります。英語でCALLING／コーリングとは、「召し」という意味と「呼ぶ」という意味があります。その教会の歴史の中で生きた二〇〇名

と相通するものがあることに気付かされ、今私は、この長坂聖マリヤ教会の壁や土台の石をそつと撫で、額を押し当てたくなくなります。

二〇〇九年九月二三日、私たちは日本聖公会宣教一五〇周年を祝いました。裸足で宣教する、すなわち、日本聖公会が日本という地において、日本にいる人たちに、自分たちの言葉で、彼らにとっての福音を語るこの大切さをカンタベリー大主教はその説教の中で力説されました。「こぎ出せ、沖へ」という主題で私たちの一五三年目が始まっていますし、この教会としては創立五〇周年を迎えています。私たちの宣教とはどのようなものでしょうか。「宣教とは何か」とよく尋ねられますが、私は宣教とはとても単純なことだと思っています。簡単に言いますと、宣教とはキリストの福音を証しすること、そして、人々をキリストの愛と交わりにお招きすること、それに尽きてしまうと思います。自分の言葉で、自分の生き方で、生きざままでキリストを証しすることです。人の言葉ではなく自分の言葉で、み言葉を、イエス様の愛を、私への慈しみを、自分にとっての喜びを、希望を人々に語ることです。牧師任せではなく、教会の長老の信徒任せでもだめなのです。あなたがどのようにイエス様を、福音の喜びを伝えていくか、それに尽きる。私はいつもそのように思っています。宣教を語る時、現状の困難な問題の指摘



や分析も必要かもしれませんが、それ以上に、自分にとって、また教会として今誇れること、嬉しいこと、希望や夢に目を向けることが大切ではないでしょうか。それは決して現実逃避ではなく、キリストの福音に根ざした私たちの信仰のあり方だと思っています。

私たちの前を歩んでいった先輩たち、この教会を思い遣り、祈り、働き、献げてきた聖職・信徒の方たちの信仰を想う時、彼らの信仰から、また、完成がはるか彼方であっても、一つひとつ確実に大聖堂のために石を積み上げ続けた、世界中の、名も知られぬ多くの人々の信仰から、いつも夢や希望を持ち続けるという信仰の核心を教えられるような気がします。なぜ、私たちはこのような夢や希望を持ち続けられるのでしょうか。それは、私たちの信仰が復活への希望というものに基づいているからです。

私は毎年、イースターの頃、北海道で、酪農とじゃがいもの産地として有名な今金のインマヌエル教会を巡回します。それはこの農村の教会がとても大事にしている「種の祝福」の礼拝をするためです。その年に蒔く種、種、麦、豆、種芋、トウモロコシなどを信徒たちは持つてきて祭壇の前に供え、私が聖水をふって祝福の祈りを捧げます。私はこの「種

の祝福式」に毎回とても大きな感動を覚えます。それはこれが私たちの復活の信仰と結びついているからです。長く厳しい北海道の冬はすべての生命の痕跡を消してしまい、この「種の祝福式」の時も、雪に覆われ凍った大地は一面死の世界のようです。何の希望も夢もそこには見られませんが、この死の世界の中で、農業に従事する信徒たちは、復活の主の生命が与えられることを信じて静かに待ちます。今の現実がどんなに暗くても、どんなに厳しくても、それが永遠に続くのではなく、主の溢れる生命と恵みが与えられ、秋には豊かな収穫が得られると信じて、今からその収穫の喜びを先取りしているのです。

ゴルゴタの丘の彼方に復活があることをすでに知っている私たちには、いつも一条の光り、希望と夢があります。この希望と夢に目を向けつつ、順境の時も、逆境の時も、日々の小さな信仰の営みを忠実に続けていくことを大切にしたいものです。それが、私たちの信仰の先輩たちが、私たちに証ししてくださっていることではないでしょうか。

長坂聖マリヤ教会の皆様、教会創立五〇周年、誠におめでとうございます。

長坂聖マリヤ教会の上に、主の豊かな祝福がありますように。 アーメン



創立五〇周年記念礼拝の後、会館前ウッドデッキでの集合写真



※長坂聖マリヤ教会創立五〇周年記念礼拝は、二〇一二年六月三日、日本聖公会首座主教・北海道教区主教植松誠師父を説教者に迎え、横浜教区主教三鍋裕による司式、清家智光司祭、眞野玄範執事による補式によって執り行われました。礼拝出席者は約七〇名でした。

(資料) 歴代教会委員

1962	金原万吉	輿水江つ	白倉昇一	早川登	山田百合子	
1963	有坂文夫	飯島禹賢	金原万吉	早川登	白倉昇一	
1964	飯島禹賢	白倉和子	瀬戸正巳	早川登	白倉昇一	
1965	飯島禹賢	白倉和子	瀬戸正巳	早川登	白倉昇一	
1966	飯島禹賢	坂本寿枝	白倉和子	白倉昇一	瀬戸正巳	
1967	飯島禹賢	坂本寿枝	白倉和子	白倉昇一	望月秋子	
1968	飯島禹賢	坂本寿枝	白倉和子	白倉昇一	望月秋子	
1969	飯島禹賢	輿水江つ	白倉勝三	原利一	望月秋子	
1970	飯島禹賢	輿水江つ	白倉昇一	原利一	望月秋子	
1971	飯島禹賢	輿水江つ	白倉昇一	原利一	望月秋子	
1972	* 飯島禹賢	輿水江つ	白倉昇一	原利一	望月秋子	
1973	* 飯島禹賢	輿水江つ	白倉和子	白倉昇一	望月秋子	
1974	* 飯島禹賢	輿水江つ	清水勝秋	望月秋子		
1975	輿水江つ	佐野紀人	* 白倉昇一	前島毅	望月秋子	
1976	浅川敏	輿水江つ	* 佐野紀人	前島毅	望月秋子	
1977	浅川敏	輿水江つ	* 佐野紀人	前島毅	望月秋子	
1978	浅川敏	輿水江つ	堀内正基	* 前島毅	望月秋子	
1979	浅川敏	輿水江つ	堀内正基	* 前島毅	望月秋子	
1980	浅川敏	輿水江つ	内藤伊久磨	* 前島毅	望月秋子	
1981	* 浅川敏	輿水江つ	内藤伊久磨	前島毅	望月秋子	
1982	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	内藤伊久磨	前島毅	
1983	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	内藤伊久磨	前島毅	
1984	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	齊藤良治	前島毅	
1985	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	齊藤良治	前島毅	
1986	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	齊藤良治	前島毅	
1987	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	齊藤良治	前島毅	
1988	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	瀬戸けさ子	前島毅	
1989	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	瀬戸けさ子	前島毅	
1990	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	瀬戸けさ子	前島毅	
1991	相山幸恵	* 浅川敏	輿水江つ	瀬戸けさ子	前島毅	
1992	相山幸恵	* 浅川敏	佐野紀人	秦恵子	前島毅	
1993	相山幸恵	* 浅川敏	佐野紀人	秦恵子	前島毅	
1994	相山幸恵	浅川敏	輿石敏彦	* 佐野紀人	前島毅	
1995	相山幸恵	浅川敏	金野奉晴	* 佐野紀人	前島毅	
1996	相山幸恵	浅川敏	輿石敏彦	* 佐野紀人	前島毅	
1997	相山幸恵	浅川敏	輿石敏彦	* 佐野紀人	前島毅	
1998	相山幸恵	浅川敏	植月美代子	* 佐野紀人	前島毅	
1999	相山幸恵	* 浅川敏	植月躋	輿水和子	佐野紀人	
2000	相山幸恵	浅川敏	植月躋	輿水和子	* 佐野紀人	
2001	相山幸恵	浅川敏	植月躋	輿水和子	* 佐野紀人	
2002	相山幸恵	浅川敏	植月躋	大野正雄	* 佐野紀人	
2003	相山幸恵	浅川敏	植月躋	* 佐野紀人	堀内正基	
2004	相山幸恵	浅川敏	浅川安子	輿石敏彦	* 佐野紀人	前島保子
2005	相山幸恵	浅川敏	浅川安子	輿石敏彦	* 佐野紀人	前島保子
2006	相山幸恵	浅川敏	浅川安子	蒲谷茂	* 佐野紀人	
2007	相山幸恵	浅川安子	植松昌	蒲谷茂	* 佐野紀人	
2008	相山幸恵	浅川安子	植松昌	蒲谷茂	* 佐野紀人	
2009	相山幸恵	浅川安子	植松昌	* 佐野紀人		
2010	相山幸恵	浅川安子	* 佐野紀人	浜口真理		
2011	相山幸恵	浅川安子	植松昌	* 佐野紀人	浜口真理	
2012	浅川安子	植松昌	後藤信哉	* 佐野紀人	浜口真理	



* 印は信徒代議員

(資料) 統計表

年度	主日礼拝出席者数	陪餐者数	受洗者数	受堅信者数	転入者数	現在信徒数	在籍信徒総数	日曜学校在籍生徒数
1962	14.0	8.0	2	0	1	49	55	20
1963	15.0	8.0	3	5	5	56	62	10
1964	18.0	13.0	4	3	6	60	67	35
1965	19.0	15.0	3	3	5	66	74	35
1966	18.0	13.0	4	4	1	69	77	60
1967	17.0	12.0	1	1	1	69	77	30
1968	16.0	12.0	3	1	0	68	76	30
1969	16.0	14.0	4	4	2	72	80	40
1970	15.0	13.0	2	2	2	76	82	50
1971	14.0	11.0	2	0	0	72	80	50
1972	15.0	11.0	5	3	0	76	86	55
1973	21.0	13.0	4	6	0	77	88	40
1974	25.0	15.0	3	2	1	76	90	50
1975	23.0	16.0	2	4	3	79	94	50
1976	21.0	14.0	8	9	1	84	99	76
1977	26.0	17.0	0	0	3	87	102	55
1978	25.0	16.0	4	2	3	89	104	85
1979	24.0	14.0	12	8	0	65	111	102
1980	20.0	15.0	1	4	0	65	110	67
1981	19.0	15.0	1	1	2	64	112	45
1982	19.0	13.0	2	0	7	70	115	27
1983	17.0	12.0	2	1	1	67	116	27
1984	20.0	14.0	1	2	8	69	120	27
1985	22.0	15.0	1	1	4	72	124	15
1986	24.0	16.0	0	0	1	73	123	10
1987	19.0	13.0	1	0	5	79	129	6
1988	19.3	14.1	1	2	0	78	128	3
1989	18.6	13.3	0	1	2	79	128	休校
1990	-	-	-	-	-	-	-	休校
1991	19.9	15.1	0	3	0	79	128	休校
1992	18.1	15.4	0	1	1	80	129	休校
1993	17.4	16.0	0	0	0	79	128	休校
1994	21.0	17.0	1	0	3	40	123	休校
1995	18.0	12.0	1	1	0	36	116	休校
1996	23.0	17.0	0	1	0	33	116	休校
1997	9.9	8.0	1	0	3	32	116	休校
1998	23.1	17.4	3	0	3	39	122	休校
1999	31.4	19.3	6	0	0	45	127	休校
2000	31.0	18.4	4	2	0	46	128	休校
2001	27.6	17.5	0	2	2	47	129	8
2002	25.8	18.8	3	1	0	47	129	7
2003	27.6	20.3	3	5	0	48	128	休校
2004	22.6	19.3	0	0	0	45	125	休校
2005	-	-	-	-	-	-	-	休校
2006	22.6	19.3	0	0	1	48	129	休校
2007	24.3	19.5	6	4	1	37	134	休校
2008	19.3	17.0	1	1	4	33	127	休校
2009	18.8	17.1	1	1	0	34	124	休校
2010	16.8	15.0	2	0	0	35	114	休校
2011	26.1	22.8	3	4	9	63	120	3

(資料) 長坂聖マリヤ教会年表

年	出来事	牧師	教区主教	備考
一九三六年	○ 日本聖徒アンデレ同胞会(BSA)、指導者訓練キャンプ場の候補地として清里を視察		第四代主教 サミュエル・ヘーズレット 1922~1940	昭和初期、山梨県は日本全国の中で沖繩に次いで最貧県であった。
一九三八年	七月二十四日 清泉寮の落成式がヘーズレット主教の司式で行われる			三五年 小海線全線開通。当初は太平洋と日本海を結ぶ中部横断鉄道として構想されていた。多くの朝鮮人労働者が工事に従事。
一九四四年	○ 強制疎開の命令を受けて大島の藤倉学園が清泉寮を買い取り、移ったが、冬の厳しさや食料不足で何人もの子どもたちが亡くなる。			三八年四月一七日 小河内ダム建設で丹波山村を退去した二八戸、六二人が八ヶ岳念場ヶ原に入植
一九四六年	○ 清里聖アンデレ教会の前身がBSAによる農村センター構想の一環で誕生。ポール・ラッシュ博士は北巨摩に七つの教会を建てたという願いを持っていた。 ○ 宿谷司祭、植松執事(十二月に司祭按手)が七月に清里に着任、上田の水藤司祭、岡谷の竹淵司祭と協力して伝道にあたった。		第五代主教 須貝止 1941~1947	四二年 日米開戦に伴い、ポール・ラッシュ博士、米国に送還される。
一九四八年	五月二十五日 清里聖アンデレ教会創立(前年の信徒九名、この年には三十一名、一九六〇年には一四五名)		第六代主教 ライト前川真二郎 1948~1953	四五年 日本敗戦。ポール・ラッシュ博士、GHQ将校として再来日。
一九五五年	○ 「信愛伝道会」が誕生。その活動により長坂聖マリヤ教会の基礎がつくられる。長坂の教会創立と共に解散。			四八年 甲陽病院開院
一九五七年	○ 最初の弘道所が箕輪に開所			五一年 キープ協会にトラクターとジャージー牛が届く
一九五八年	一月二十九日 箕輪弘道所にて初聖餐式。津金、若神子、長沢、北割の信徒が集まった。			五六年 『古今聖歌集』採用(出版は五九年)
一九六一年	○ 長坂聖マリヤ教会の聖堂建築計画が具体化。農村教会設立のため、米国婦人信徒から献金。 六月二十八日 地割式、十一月三〇日 定礎式		第七代主教 イサク野瀬秀敏 1954~1965	五九年 日本聖公会宣教一〇〇年記念大会、祈祷書改訂 六〇年一月 日米安保条約締結 六一年 池田内閣所得倍増計画


年	出来事	牧師	教区主教	備考
一九六二年	<p>一月 清里聖アンテレ教会定例教会委員会が教会区について協議され、弘法坂から下に住む信徒、五二名が長坂へ行くことに。</p> <p>三月一七日 長坂聖マリヤ教会の第一回信徒総会が牧師館で開かれる</p> <p>三月二三日 植松従爾司祭、「山梨県長坂地区の牧会並に同地に教会設立の準備を命ずる」任命書を受ける</p> <p>四月二二日 清里に残る信徒と長坂に移る信徒が復活日礼拝を共にし、その後、植松司祭及び長坂に移る信徒は長坂に異動。</p> <p>四月二五日 長坂聖マリヤ教会の設立認可があり、植松司祭が牧師に任命される</p> <p>六月六日 長坂聖マリヤ教会聖堂聖別</p>	司祭 アブラハム植松従爾	第七代主教 イサク野瀬秀敏 1954~1965	<p>六二年 南東京教区を横浜教区と改称 六二〜六五年 第二八チカン公会議</p>
一九六三年	<p>○ 植松司祭が一年間（四月〜翌三月まで）米国と英国に留学・視察。</p> <p>四月 ポール・ラッシュの友人サラ・ダール夫人から寄贈された約五〇本のハナミズキを植樹</p> <p>○ 大学入学前のサムエル興石勇氏（現北関東教区司祭）、半年間ベストリーに居住</p> <p>○ 四つの弘道所で月例集会</p>	管理司祭 ジャスチン・マター八城昂一		<p>六四年 東京オリンピック</p>  <p>八城昂一司祭</p>  <p>植松従爾主教</p>
一九六四年	<p>○ 高良孝太郎氏（現沖縄教区司祭）、長坂の牧師館に住み込み、高校の三年間を過ごす</p> <p>○ 三つの弘道所で月例集会</p>			
一九六五年	<p>○ 六つの弘道所で月例集会</p>			
一九六六年	<p>○ 毎週水曜日に求道者会（聖書研究会）</p>			

年	出来事	牧師	教区主教	備考
一九六七年	○青年会(毎月)、三ヶ所で月例伝道集会	司祭 アブラハム植松従爾	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	七〇年 大阪万博
一九六八年	○青年会(毎月)、婦人信徒の集い(毎月)、弘道所で月例伝道集会			七二年 沖繩教区誕生
一九六九年	○テモテ望月(三井)淳二聖職候補生が実習勤務	司祭 アブラハム植松従爾	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	沖繩復帰、日中国交正常化
一九七二年	三月七～八日 第一回巡礼(主教座聖堂、東京聖アンデレ)※「巡礼」は、長坂、清里の受洗者が主教座聖堂に行つて堅信を受ける機会に、同伴者共々、東京近郊及び教区内の諸教会を巡る旅として始まり、十一回を数えた。第四回までは初めに堅信式が行われた。第六回まで清里と長坂の合同で行われた。			七三年 教区宣教一〇〇年記念礼拝 石油シヨック、ベトナムから米軍撤退
一九七三年	二月二二～二三日 第二回巡礼(主教座聖堂、東京聖アンデレ、立教大学)	司祭 アブラハム植松従爾	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	七六年 ロッキード事件
一九七四年	二月一五～一六日 第三回巡礼(主教座聖堂、房州教会巡り) ○白倉昇進兄および三人の孫たちがハナミズキの実を採取。翌年播種し、数年かけて苗を育てる			七七年 横浜教区第一回教区総合家族キャンプ(清里・清泉寮) 連合赤軍によるダツカ日航機ハイジャック事件
一九七五年	一月二七～二八日 第四回巡礼(主教座聖堂、沼津)	(管理) 司祭 バルナバ武藤六治 牧師補 執事 マルコ高田眞	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	七〇年代末「清里ブーム」が始まる
一九七六年	二月二一～二二日 第五回巡礼(主教座聖堂、銚子) 九月一五日 中部教区、植松従爾師を主教に選出 十一月 植松従爾師が中部教区第六代主教として転任、高田眞執事が着任。			※萌木の村(79)、清里の森別荘地(85～88)、オルゴールの博物館 ホールオブホールズ(86)、丘の公園ゴルフ場(86)、大泉清里スキー場(90)
一九七七年	三月一～二日 第六回巡礼(主教座聖堂、名古屋聖マタイ、名古屋聖マルコ) 四月二十四日 創立一五周年記念礼拝	(管理) 司祭 バルナバ武藤六治 牧師補 執事 マルコ高田眞	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	七〇年代末「清里ブーム」が始まる

年	出来事	牧師	教区主教	備考
一九七七年	<p>十二月十四日 高田眞司祭按手式</p> <p>一月一日 十五周年記念誌発行</p> <p>三月十九～二十日 第七回巡礼（主教座聖堂、山手、逗子、鎌倉、聖ミカエル学院）</p> <p>十二月十二日 ポール・ラッシュ博士逝去</p> <p>○この当時の定例行事：清里長坂信徒懇親会、被献日清里長坂合同聖餐式、清里長坂日曜学校一日キャンプ、清里長坂日曜学校教師学習会、伝道映画会、県下中高生修養会、収穫感謝の日礼拝（捧物を韮崎市立老人ホーム静心寮に寄付）、県下教役者会、県下合同教会委員会</p> <p>○信甲教役者会を開始（山梨と長野の県境地域の宣教を模索）</p> <p>○八月 入江修神学生夏期勤務</p>	司祭 マルコ高田眞	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	七八年 ランベス会議
一九七九年	<p>四月 白倉昇進兄の育てたハナミズキの苗木を、緒教会に届ける（横浜聖アンデレ、山手、鎌倉、小田原、藤沢、平塚、大磯、林間、こどもの園、市川、千葉、八日市場、茂原、銚子）</p> <p>四月二～三二日 第八回巡礼（主教座聖堂、秦野、小田原）</p> <p>○日曜学校（長坂・毎週、箕輪・第二、長沢・第三、教師会・第四）</p> <p>○家庭集会（高根・毎月）</p>	司祭 マルコ高田眞	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	八〇年四月 日本聖公会 第二回 宣教協議会 ローマ教皇初来日 箕輪以外の弘道所が閉鎖される
一九八〇年	<p>五月七～八日 第九回巡礼（主教座聖堂、川崎、全生園、ナザレ修女会）</p> <p>○県下三教会合同ソフトボール大会、県下三教会司式者交換、山梨県下三教会合同のお花見会が始まる</p> <p>○日曜学校（長坂・毎週、箕輪・第一、長沢・第三、教師会・第四）</p> <p>○第一日曜を奉仕日として境内地の草取り等を行うようになった</p> <p>○八月 入江修神学生夏期勤務</p>	司祭 マルコ高田眞	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	八〇年四月 日本聖公会 第二回 宣教協議会 ローマ教皇初来日 箕輪以外の弘道所が閉鎖される
一九八二年	<p>五月七～八日 第九回巡礼（主教座聖堂、川崎、全生園、ナザレ修女会）</p> <p>○県下三教会合同ソフトボール大会、県下三教会司式者交換、山梨県下三教会合同のお花見会が始まる</p> <p>○日曜学校（長坂・毎週、箕輪・第一、長沢・第三、教師会・第四）</p> <p>○第一日曜を奉仕日として境内地の草取り等を行うようになった</p> <p>○八月 入江修神学生夏期勤務</p>	司祭 マルコ高田眞	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	八〇年四月 日本聖公会 第二回 宣教協議会 ローマ教皇初来日 箕輪以外の弘道所が閉鎖される





高田眞司祭


年	出来事	牧師	教区主教	備考
一九八二年	<p>三月二二～二四日 第十回巡礼（主教座聖堂、平塚、進和学園、エリザベス・サンダースホーム）</p> <p>○前島毅兄が白倉昇進兄を継ぎ、ハナミズキの実生の苗を育てる</p> <p>○日曜学校（長坂・毎週、箕輪・第二、長沢・第三、教師会・第四）</p> <p>○八二～八三年の二年間、山梨県三教会で初めて教区婦人会役員を担当（奥水江つ姉が会長、前島保子姉、浅川安子姉が書記）</p>	司祭 マルコ高田眞	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	八二年 中央道全線開通
一九八三年	<p>三月十六～十七日 第十一回巡礼（主教座聖堂、平塚、浜松）</p> <p>十二月二二日 当教会出身のフランス中山茂司祭按手式（東北教区）</p> <p>○日曜学校（長坂・毎週、箕輪・第二・四、教師会・第三）</p> <p>○牧会学習会、家庭集会、婦人会（第一）</p>	司祭 マルコ高田眞	第八代主教 ステパノ岩井克彦 1966～1983	八三年 教区宣教一〇周年記念礼拝
一九八四年	<p>二月二六日 植松誠師、司祭按手式（大阪教区）</p> <p>○日曜学校（長坂・毎週、箕輪・第二・四、教師会・第三）、家庭集会</p>	司祭 マッテヤ大澤克次	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	八四年八月一三～一五日 教区大家族キャンプ（清里・清泉寮）
一九八五年	<p>一月三〇日 高田眞司祭離任、大澤克次司祭着任</p> <p>○婦人会でざぶとん作りを行った。</p> <p>○代祷のうちにある誕生記念日の人、病者に手紙を送ることを婦人会で始める。</p> <p>○婦人会で高齢者・病者にクリスマスプレゼントを届ける活動が始まる（以後、二〇〇二年度迄）。</p> <p>○浅川安子姉が一九八〇年に立ち上げた地域の奉仕活動グループ「長坂金曜会」に婦人会のメンバーが継続的に参加した。</p> <p>○聖書勉強会（毎週水曜日）が始まる。</p> <p>○日曜学校（長坂・毎週、箕輪・第一・三、教師会・第三）</p>	司祭 マッテヤ大澤克次	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	 <p>大澤克次司祭</p> <p>八五年一月二四日 ポール・ラツシュ来日六〇周年記念礼拝</p>

年	出来事	牧師	教区主教	備考
一九八六年	<p>一月二日 教区婦人会にて、小冊子『わが主マルタを愛す』（浅川敏訳）五〇〇部を各教会に配布</p> <p>五月十八日 聖餐式が対面式になった</p> <p>八月十七日 平和記念ミサ（司式・説教：マイケル・イブグレイブ司祭（現・英国教会ウーリッジ教区主教））</p> <p>十月二七日 平和を祈る諸教会の集い（当教会にて）</p> <p>○平和記念ミサ及び「小さな平和の集い」（講演会）を始める</p> <p>○日曜学校（長坂・毎週、教師会：第三）、家庭集会（高根、小淵沢、津金）</p> <p>十一月一日 冊子『平和の黙想：ピースメーカーの証言』発行</p>	司祭 マッテヤ大澤克次	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	<p>八六年 チェルノブイリ原発事故 中央道長坂IC開通</p>
一九八七年	<p>一月十九日 山梨県教会一致懇談会祈祷会（当教会にて）</p> <p>八月 「おやこ平和文庫」後援会発足 ※地域に開かれた「戦争体験を心に刻み、『平和をつくりだす人々』に役立つ場」として文庫設置</p> <p>九月十五日 県下合同礼拝（当教会にて）※以後、毎年実施</p> <p>○家庭集会（高根、小淵沢、津金）、病床聖餐（クリスマス、イースターに）</p>	司祭 マッテヤ大澤克次	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	<p>八七年 日本聖公会組織成立一〇〇年 記念行事 新共同訳聖書刊行</p>
一九八八年	<p>九月十五日 県下合同礼拝（当教会にて）※以後、毎年実施</p> <p>○家庭集会（高根、小淵沢、津金）、病床聖餐（クリスマス、イースターに）</p>	司祭 マッテヤ大澤克次	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	<p>八九年八月十三～十五日 教区大家族 キャンプ（清里・清泉寮）</p>
一九八九年	<p>五月十二日 甲府「尚古園」（老人ホーム）にハナミズキ二十本寄贈</p> <p>○聖書を読む会（水）、家庭集会（高根、小淵沢、津金、小荒間）</p>	司祭 マッテヤ大澤克次	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	<p>八九年八月十三～十五日 教区大家族 キャンプ（清里・清泉寮）</p>
一九九〇年	<p>四月二四～二六日 教会巡り（房州）</p> <p>○聖書を読む会（水）、家庭集会（高根、小淵沢、津金、小荒間）</p>	司祭 マッテヤ大澤克次	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	<p>九〇年 祈祷書改訂 東西ドイツ統一</p>
一九九一年	<p>五月十三～十四日 教会巡り（岡谷、松本）</p> <p>六月九日 教会設立三〇周年記念礼拝（植松従爾主教説教、五〇名出席）</p> <p>十一月三日 聖鐘・聖塔祝別式（三十周年記念事業）</p>	司祭 マッテヤ大澤克次	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	<p>九〇年 祈祷書改訂 東西ドイツ統一</p>

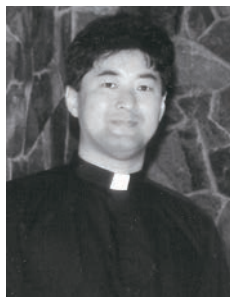
年	出来事	牧師	教区主教	備考
一九九二年	八月六～二八日 田中英和神学生 夏期勤務 十二月九日 聖鐘を横浜新伝道(横浜聖クリストファー教会)に移譲			九二年 日本のバブル経済崩壊
一九九三年	四月二〇～二二日 教会巡り(横浜聖アンデレ、八日市場、銚子) 七月三十一～八月二十九日 大野清夫神学生 夏期勤務 一〇月二十九日 定例教会委員会にて、十年位を目処に牧師館の新築を考えることを決議。 ○ 家庭集会(高根、小淵沢、小荒間、津金) ○ 教区婦人会の会長を浅川安子姉が、書記を相山幸恵姉が、会計監査を前島保子姉が務める。	司祭 マッテヤ大澤克次		九三年三月二〇日 横浜新伝道「聖クリストファー教会」献堂式 九三年八月八～十日 教区大家族キャンプ(清里・清泉寮) 九三年九月 教区宣教一二〇年記念大 礼拝
一九九四年	三月二十九～三〇日 大澤司祭離任、古川司祭着任 八月六～二八日 小林祐二神学生 夏期勤務 ○ 子どものためのクリスマス会が始まる ○ 桜花見(清春、四月一七日)、教会お泊まり会(八月二～四日)、家庭集会(高根、小淵沢、小荒間)	司祭 イマヌエル古川潤児	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	九四年 松本サリン事件
一九九五年	一月二二日 葦崎カトリック教会と一致礼拝(葦崎にて) 七月二日 武藤六治師父、京都教区主教に按手される 八月 宇津山武志神学生 夏期勤務 ○ この年から「平和祈念会」(「平和記念ミサ・小さな平和の集い」から改称)が県下三教会共同主催で行われるようになる ○ 秋の遠足(一〇月二八日 原村) ○ 横浜パロックス室内合奏団演奏会(四月一四日 受苦日)、宣教コンサート(九月三〇日、フィリア美術館にて、志村拓生オルガン演奏)			九五年一月十七日 阪神淡路大震災 九五年八月二八～三一日 日本聖公会 宣教協議会(清里・清泉寮)

年	出来事	牧師	教区主教	備考
一九九六年	一月二日 峡北地区キリスト者一致祈禱週間礼拝(当教会にて) 八月二〇～三〇日 片山謙神学生 夏期勤務 ○山梨県三教会日曜学校を語る会 ○春の遠足(五月六日、小布施)、秋の遠足(十一月三〇日、スパテイオ小淵沢) ○伊藤健爾ギター演奏会(四月五日 受苦日)、アントウル・レ・ブランク弦楽四重奏団演奏会(六月七日)	司祭 イマヌエル古川潤児	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	 古川潤児司祭
一九九七年	三月二日 北海道教区植松誠主教按手式 九月二〇日 講演会「韓国に生きた浅川巧・ご存知ですか」(講師：山村正光)を山梨県三教会で共同開催 ○礼拝堂玄関、障害者用トイレ増築工事 ○峡北弦楽四重奏団演奏会(三月二八日 受苦日)、35周年記念音楽会(八月二三日、オルガン：日野正雄、ソプラノ：海野紀美子)			
一九九八年	七月二五～八月一〇日 島田征吾神学生 夏期勤務 七月二九～三一日 教区サーパー研修会(当教会にて) ○秋の遠足(十一月二二日、奈良井宿)	司祭 イマヌエル古川潤児 牧師補 執事 オーガスチン松村誠		九九年八月九～十一日 教区大家族 キャンプ(清里・清泉寮)
一九九九年	四月二日 松村誠執事着任 七月二八～三〇日 教区サーパー研修会(当教会にて) ○秋の遠足(十一月一〇日、清水聖ヤコブ教会) ○聖書研究会(週一回)、八ヶ岳南麓賛美歌をうたう会(毎月、第五〇回まで行われた。古川司祭が代表となり、超教派の集まりとして、主に聖堂以外の場所を会場にして開催された)			

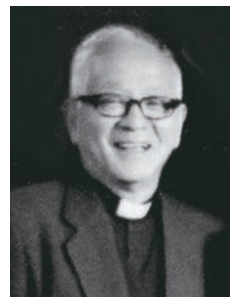
年	出来事	牧師	教区主教	備考
二〇〇〇年	六月十六日 松村誠司祭按手式、副牧師拝命 六月十八日 黙想と祈りの集い（指導：植松功） 八月三十一日 古川潤児司祭 牧師退任 九月一日 松村誠司祭 牧師就任 ○春の遠足（五月二十五日、明野村フラワーセンター）	司祭 イマヌエル 古川潤児		○〇年四月一九日 長坂IC前にシヨッ ピングセンター「キララ・シティ」 がオープンし、長坂の商店街は急 速に空洞化が進んだ。
二〇〇二年	三月二十七日 主教座（チャンセル内の椅子） 聖別・設置 ○教会絵はがきの制作始まる ○農作物の献品の減少、献品先の事情等により、収穫感謝礼拝はこの年が最後となった。	司祭 オーガスチン松村誠	第九代主教 ラファエル梶原史朗 1984～2001	 松村誠司祭
二〇〇三年	二月三日 当教会に在籍したペテロ高良孝太郎司祭按手（沖縄教区） 五月十一日 エッファタの会（当教会にて、八〇名参加） 六月三〇日 黙想と祈りの集い（指導：植松功） ○教会絵はがき第一集発行	司祭 オーガスチン松村誠	第十代主教 ヤコブ遠藤哲 2002～2008	○三年八月一四～一六日 教区宣教 一三〇年記念感謝大家族キャンプ （清里・清泉寮） ○四年 インドネシア・スマトラ沖地震
二〇〇四年	一月十五日 臨時信徒総会にて、会館・牧師館の立て替えのための取り壊しを承認 ○「おやこ文庫」後援会を解散、基金は建築資金に。 一月十八日 葦崎カトリック教会と合同礼拝（当教会にて） ○エラン弦楽四重奏団によるチャリティコンサート（八月十一日） ○山梨県で教区婦人会執行部を担当、相山幸恵姉と松村聖子姉が書記を務める ○藤田みち子姉等の奉仕で白の御棺覆いが完成。	司祭 オーガスチン松村誠	第十代主教 ヤコブ遠藤哲 2002～2008	○四年十一月 北巨摩郡に属していた 明野村・大泉村・須玉町・高根町・ 長坂町・白州町・武川村が合併し て「北杜市」となる。

年	出来事	牧師	教区主教	備考
二〇〇五年	一月九日 臨時信徒総会にて年内中の会館・牧師館の新築を決議 一月二三日 葦崎カトリック教会と合同礼拝（葦崎にて） 九月十七日 新牧師館祝福式 十一月三日 会館落成式 ○宮沢賢治についての講演・弾き語りの集い（五月二八日）、チャリティコンサート（二月一六日）	司祭 オーガスチン松村誠	第十代主教 ヤコブ遠藤哲 2002～2008	○五年四月二日 ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世逝去 ○六年三月 小淵沢町が北杜市に加わり、「北巨摩郡」はなくなる。 ○六年十一月 全面改訂された聖公会の新しい聖歌集が出版される。
二〇〇六年	一月二日 葦崎カトリック教会と合同礼拝（当教会にて） 二月十一日 聖堂と会館の間の廊下とスロープ設置 ○CD制作、楽団の練習等に新会館が貸し出される ○会館改築記念チャリティコンサート（八月二六日）、山本晴美さん歌語り（九月三日）、アコースティックナイト（九月三日）、ブルーグラス・チャリティコンサート（二月一〇日）、MCカンタービレによるマンドリン・クリスマスコンサート（二月二四日）、身延ジュニアコーラスのミニコンサート（二月二四日）			
二〇〇七年	八月八日 ピースデイ（当教会にて、約一五〇名参加） ○森の幼稚園、oshoワークショップに、定期的に貸館。 ○breathチャペルコンサート（五月二二日）、松尾地恵子チャリティコンサート（八月二五日）、ブルーグラス・チャリティコンサート（九月一六日）、Too Dumb to Dieライブ（一月九日）			
二〇〇八年	四月一日 友寄景方執事着任 ○家庭集会が再開される（長坂・毎月）	(管理) 司祭 ルカ 武藤謙一 牧師補 執事 パウロ友寄景方	第十一代主教 ローレンス三鍋裕 2008～現在	 友寄景方執事

年	出来事	牧師	教区主教	備考
二〇〇九年	<p>○ サマーコンサート（八月二二日、マーチン・フォーゲルによるギター演奏）</p> <p>○ 家庭集会（長坂・毎月）</p>	<p>（管理）司祭 ダビデ 島田征吾</p>	<p>第十一代主教 ローレンス三鍋裕 2008～現在</p>	<p>二〇〇九年八月一三～一五日 教区大 家族キャンプ（清里・清泉寮）</p> <p>二〇〇九年九月二三日 日本聖公会宣 教一五〇年記念礼拝</p>
二〇一〇年	<p>三月二二日 友寄執事が異動し、清家智光司祭が囑託牧師に着任（定住教役者がいなくなる）</p> <p>○ 家庭集会（長坂・毎月）</p>			
二〇一一年	<p>四月一日 眞野玄範聖職候補生着任</p> <p>十二月三日 眞野玄範執事按手式</p> <p>○ マリヤコンサート（七月一〇日、演奏：永井みどり・永井祐子）、平和記念講演会（七月一八日、講師：植松功）</p> <p>○ 家庭集会（長坂・毎月）、聖書朗読会（大泉・毎週）</p>	<p>牧師補 執事 パウロ眞野玄範</p>		
二〇一二年	<p>一月二六日 山梨県教会一致懇談会祈禱会（当教会にて）</p> <p>六月三日 長坂聖マリヤ教会 五〇周年記念礼拝</p> <p>十一月四日 岡谷聖バルナバ教会と合同礼拝（岡谷にて）</p> <p>○ 家庭集会（長坂、白州、小荒間他）、聖書朗読会（大泉・毎週）、聖書を学ぶ会（会館・毎週）、逝去者記念礼拝（毎月末土曜日）</p> <p>○ 平和記念講演会「キリスト者としての浅川巧」（八月一八日、講師：広谷和文司祭）、第二回マリヤコンサート（九月三日、演奏：森田基子）</p>	<p>囑託牧師 司祭 清家智光</p>		<p>二〇一一年三月二日 東日本大震災</p>



眞野玄範執事



清家智光司祭

編集後記

執事 パウロ眞野玄範

教会の記念誌は何のために作るのか。関係者が昔を懐かしむためのものなのか。当初より清家司祭からこのような問いかけを受けつつも、原稿が集まり始めるまで編集方針に関してあまり確かな思いを持つことができませんでした。

割り付けをしながら最初の輪郭が見えてきた時に初めて、教会の記念誌とはまさに教会そのものを表すものだとすることに思いが至りました。建物のことや活動のことばかりが記されていたらどうでしょうか。教会の記念誌なのか、宣教・奉仕団体の記念誌なのか、はたまたどこかの文化会館の記念誌なのか、識別できないものになることでしょうか。教会の記念誌たるもの、神の民の姿と歩みが浮かび上がり、共にする祈りが伝わってくるものでなければ…。このことによりやく気づかされたのでした。本当は教会員全体で記念誌の意味をよく考え、分かち合い、そこから出発してこそ、よい記念誌ができるのでしょうか。この共同体に仕える者として未熟であったことを痛く感じ入りました。

そんな反省から教会委員会で再協議して、六月三日の創立五〇周年記念礼拝に間に合わせる予定であった発行を五ヶ月先に延ばし、現在集まっている信徒に広く呼びかけて原稿を集めることになって、多くの労を取って記念

誌の骨格を作られた植松昌兄から私が編集責任を引き継ぎました。当初のスケジュールで原稿をお寄せくださった皆様には申し訳ありませんでした。

創立年の月報に、今年四月二四日に一〇一歳で逝去された興水江つ姉の言葉を見つけました。「新しく誕生した長坂の聖マリヤ教会。これこそ、ほんとうに純粋な農村の教会であってほしい。土にいどみ、汗とほこりにまみれた底から勤労の喜びを知る人たちの集り。数は少ないけれど、初代教会のような素朴な気持ちで互に分ちあい助け合って、この小高い丘の上の教会はあたりを照らす光である様に祈ってやまない。」この五〇年誌を通して表された現在の長坂聖マリヤ教会の姿は、江つ姉の目にどのようなように映っているでしょうか。

末筆になりましたが、この記念誌発行のためにご尽力くださった皆様に感謝を申し上げます。いちいちお名前を挙げることはいたしません。原稿や写真を寄せてくださった皆様、編集にご協力くださった皆様、また写真を提供してくださった松村誠司祭、史料収集にご協力くださった武藤六治主教、教区歴史編纂委員会の宮崎仁司祭に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

長坂聖マリヤ教会 創立 50 周年記念誌

編集委員 : 浅川敏、浅川安子、植月躋、植松昌、後藤信哉、佐野紀人、
前島保子、執事 眞野玄範、司祭 清家智光

発行日 : 2012 年 11 月

発行 : 日本聖公会横浜教区 長坂聖マリヤ教会
408-0021 山梨県北杜市長坂町長坂上条 2056-11
(URL) <http://anglican.jp/nagasaka/>
(TEL/FAX) 0551-32-2441

印刷 : 峡北印刷株式会社

表紙の写真 : 司祭 オーガスチン松村誠、題字 : モニカ清水純代

